

令和6年度千葉氏公開市民講座「武士の起源について」講演録

千葉市立郷土博物館

日時：令和6年6月29日（土） 13：30～16：00

会場：蘇我コミュニティセンターハーモニープラザ分室 3階ハーモニーホール

講師：武蔵大学人文学部教授 桃崎 有一郎氏

司会 皆さま、こんにちは。ただ今より、令和6年度千葉氏公開市民講座、『武士の起源について』を開講いたします。私は本日の司会進行を務めさせていただきます、郷土博物館の唐鎌と申します。よろしくお願いいたします。初めに、当館館長の天野よりごあいさつを申し上げます。

天野 皆さま、こんにちは。郷土博物館の天野でございます。

本日は千葉氏公開市民講座に、かくもたくさんの皆様にお運びいただき誠にありがとうございます。毎年、千葉開府の日である6月1日に因んで、この時期に開催しております本講座は、本市が四つの地域資源の一つと位置付けております千葉氏への理解を深めていただくことを目的に、気鋭の研究者の先生を講師としてお招きしております。毎回、多角的・多面的なテーマから千葉氏に切り込んでいただいております。聴講された皆様からも御好評を賜っております。

そして、本年度は、現在武蔵大学人文学部教授として、日本中世史研究者として第一線で大活躍をされる桃崎有一郎（ももさき ゆういちろう）先生を講師としてお迎えすることができました。先生の御専門は「儀礼と社会秩序の関係をモデル化すること」と著書で述べられております。その解明に当たり、儀礼の舞台としての平安京に注目され、それが武士によって中世都市京都へと変貌を遂げていく社会的・精神的背景を追究されていらっしゃいます。その内容は、極めて刺激的な提案性に満ちており、目を拓かされる思いで個人的に著書を拝読させて頂きました。更に、先生の追及はその主体である武士そのものの起源にまで遡っていかれることになりました。何故ならば、武士の誕生が「平安京の内か外か」という命題を明らかにすることが、御自身の研究課題の根幹に関わるからに他なりません。ところが、過去の膨大な研究の蓄積が、必ずしもその回答を見出し得ていないことに驚かれ、自らその解明に取り組むことにしたと、その経緯を著書『武士の起源を解き明かす』冒頭で述べていらっしゃいます。

さて、本市は2年後の令和8年（2026）、両総平氏（りょうそうへいし）の一流である千葉常胤の父常重が大治（だいじ）元年（1126）本拠を内陸の大椎（おおじ）から東京湾に面

する千葉に移し、現在まで続く町の礎を築いてから 900 年目という、節目の年を迎えます。それに当たり、改めて「武士の起源とは何か」という根本問題に立ち返って、中世武士団としての千葉氏の存在を捉え直す必要があると、桃崎先生に白羽の矢を立て御講演をお願いしました。先生は大学での授業は勿論のこと、多くの著書の執筆に割かれる時間も膨大であろうかと存じます。また、皆様も先生が NHK 等の歴史関係の番組に出演されコメントや解説をされている姿をご覧になったことがございましょう。そのような極めてご多忙でいらっしゃるなか、実に快くこのお役目を引き受けてくださいました。我々としましても、本当に感無量の思いでございます。本当に先生には心から感謝を申し上げたく存じあげます。

先生の著作には個人的に数々接してまいりましたが、複雑極まりない歴史の事実を解きあかし、そこから思いもかけぬ発見の糸口を見いだされ、事実同志を結び合わせながら、整然とご自分のお考えを論じることを常とされております。その明快な論理性は、元より研究者としての先生の優秀さに他ならないものと存じますが、一方で、若年の砌歴史小説家を目指され、実際にその執筆に勤しまれていらしたことも、現在の在り様に大いに資するものとなってはいまいかと推察するものでもございます。

最後になりますが、本日の御講演が皆様にとって、下総の地で凡そ 500 年にわたって君臨し続けた武士団である千葉氏の存在を、武士の起源から続く一つの道筋に位置付け、その再認識につなげていただく契機となりましたら幸いに存じます。この後、司会から改めて先生の御紹介がございしますが、最後には書面を通じての質疑応答の時間もご用意しております。休憩を挟んでの 1 時間余のご講演が、ご参加くださった皆様にとって有意義な学びの場となることを祈念申し上げる次第でございます。言葉は整いませんが、開会の挨拶とさせていただきます。

司会 それでは、講師の桃崎有一郎先生をご紹介します。桃崎先生は 1978 年、東京都でお生まれになり、2001 年、慶應義塾大学文学部をご卒業されました。2007 年、慶應義塾大学大学院文学研究科、後期博士課程を経て、史学の博士号を取得されました。現在、武蔵大学人文学部教授として、古代中世の礼制と法制、政治の関係史についての研究を精力的に進められておられます。

本日の御講演に関する御著書では、『武士の起源を解き明かす－混血する古代、創発される中世』（ちくま新書）がございします。また、最新の御著書としましては、『平治の乱の謎を解く－頼朝が暴いた「完全犯罪」』（文春新書）、また、『平安王朝と源平武士－力と血統でつかみ取る適者生存』（ちくま新書）の 2 冊を本年に上梓されました。本日は「武士の起源について」と題し、ご講演をいただきます。先生、どうぞよろしく願いいたします。

桃崎

はじめに

ご紹介にあずかりました桃崎と申します。本日は暑い中、お運びいただきまして誠にありがとうございます。本日、1時間半という時間で、武士の起源についてお話をさせていただきます。本来ならば、これは学校の授業だと5、6時間かけてお話しする内容でございますので、かなり本日は端折って、結論と、話の大筋のみ申し上げます。細かいことはまた、今、ご紹介いただきました、あるいは、ちょっと最後に宣伝もさせていただきますけれども、本日の講演の基になった本に、細かい根拠は全てそちらに挙げてございますので、本日は話の筋道だけ申し上げることができましたらと思います。ご紹介にあった小説のほうは私、物になりませんで、高校生の頃にちょっと挑戦しただけなのです。

武士がどこからどう生まれてきたか

やはり歴史は人がつくるものだとつくづく、子どもの頃から感じておりました。歴史は本当に学校教育の変遷と連動しておりますので、どの時代に小学校や中学校で歴史の授業を受けたかによって、学ぶストーリーが違いますね。今、子どもたちが学校で受けている授業の内容聞くと、私が受けた授業とは全く違っていています。私は昭和53年生まれで、今年46歳になりますけれども、その時代の学校教育と今日の学校教育、あるいは皆さまがたがお受けになった学校教育が、全部、違いますね。その中で一番気になるのは武士の成立。これが学会でも定説がないものですから、時代ごとに、教えるたびに変わってきます。武士の成立については習ったと誰もが何となく思っているのですが、実は習った内容が違うのですね。ですから、実は世代を超えて会話すると、会話が成り立たないということが起こっています。

それについていろいろ考えてみたのですが、学会の状況を調べてみると結論が出ていないのですね。武士の起源は何なのかということは、戦前、戦後を含めて、いろんな段階で議論してきたのですが、常に時代の状況に振り回されてしまうものですから、結論ありきでいろんな議論がされたことがあります。例えば、戦前で言えば、武士というのは天皇のために命を捨てて戦う、楠木正成（くすのきまさしげ）のような人間が理想像であるなんてことがいわれた時代もありますし、戦後はその反動で、特にマルクス主義が一時期、学会を席卷したものですから、まず、武士というのは領主であって、領主階級で、封建制が成立してどうこうという、マルクス主義歴史学に組み込まれる形でしか説明されなかったこともあります。

私が受けた小学生の頃の教育を思い出しますと、武士というのは、普段は百姓と一緒に田んぼを一生懸命耕して、汗水流して、『いざ、鎌倉』という号令がかかると、くわを投げ捨てて、刀を手にとって鎌倉に駆け付けていく、みたいなことが教えられていたのですね。ところがこれ、調べてみると全部、根拠がないといえますか、想像にすぎなかったということが分かりました。武士がいかにして生まれてきたかというのは、学会できちんとした議論が積み上げてはきたのですが、分からなくなってしまったのです。例えば、マルクス主義みた

いなグランドセオリーがあったときにはそれに従っていけばよかったです、ベルリンの壁の崩壊以後、そういう歴史学が成立しなくなって、大きな絵を誰も描けなくなってしまったんですね。武士の成立がものすごく難しい、大事な問題でありながら、専門家の見解を調べてみますと、みんな、「投げ出した」と言うのです。もう誰も手を付けなくなったと。それじゃ困るじゃないかと思ったのです。

私はもともと室町幕府の将軍が研究対象でして、足利義満（あしかがよしみつ）という3代将軍が朝廷に入ってきて、朝廷の儀式を全部再建していきます。作り直しつつ、ひっかき回していくのですけれども、「これは一体、何を意味するのだろうか」という根本的な疑問があります。つまり、この足利氏というのはよそから、関東地方からやってきて、京都をひっかき回すだけひっかき回して去っていった、そういう存在なのか、あるいは、もともと都生まれの武士がたまたま長いこと関東で成長したけれども、また都に舞い戻ってきて、故郷を建て直したのか。そういう疑問を持ったわけです。武士は地方で生まれたのか、都で生まれたのか。こういう議論があるのですけれども、学会では決着がつかなかったんですね。

かつては、武士は草深い関東地方、田舎で生まれたといわれていました。基本的にはスーパーヒーローのような扱いを受けていたと記憶しますが、その後、学会の中、一部で「武士は都で生まれたのだ。衛府（えふ）という天皇の親衛隊、あるいは都の治安維持を担うような、都の武装した武官から生まれてきたのだ」という学説が生まれてきたんですね。田舎で生まれたか、都会で生まれたか。東で生まれたか、西で生まれたか、というのが論争になりました。論争というより、西で生まれたという議論がだんだん強くなってきたのです。しかし、これも議論としてはある段階で停滞してしまって、以後、発展しないのです。調べてみますと、都で武士が生まれたというにしてはちょっと証拠が足りない過ぎます。もし都で武士が生まれたのだとしたら、鎌倉幕府とか、室町幕府に勤めた大多数の武士に、もっと都の文化が入ってきていいはずなのです。特に技術の面ですね。武技、弓矢を射る作法であるとか、さまざまな戦う技術が都流であっていいはずなのですが、どうもそうではないのです。

私、関東と関西の二つの大学で勤めたことがあるのです。西のほうで、立命館大学で少し勤めたことがあるのですが、行って見て、これは、単純に学閥の西と東の対立だということが分かりました。考えてみれば当たり前なのですが、京都の研究者というのは世界の中心が京都だと思っているところがあります。京都ではいろいろ面白い話を聞きました。「京都では庭の木をこういうふうにするのだ、田舎ではこうしますけど」と。この田舎って東京のことなのです。基本的には京都と田舎しか存在しないのです、世界には。これはちゃんと理由があって、平安時代から脈々と受け継がれている世界観、いわゆる中華思想なのですけれども、そういう考え方があって。「先進的な時代を変える文化というのは西で生まれるのが当然だ」と、西では全員、言うのです。東では誰もそれを相手にしないのです。何だ、これは仲が悪いだけじゃないか、ということが分かりました。皆、〈おらが村〉を自慢しているだけじゃないかと思ったので、これじゃ学問とは言えない。

私はどちらにも所属してないものですから、根本的な疑問があります。武士がどこからどうして生まれたのか知りたい。鎌倉幕府が、ざっくり言って1200年頃に成立したと考えても、明治維新で一応、武士がいなくなったと言えるまでに650年以上経過していますよね。大まかに700年と言ってもいいのですが、その間、武士は日本の支配者だったわけです。鎌倉幕府であろうと、室町幕府であろうと、江戸幕府であろうと。形式上、天皇がトップにいたとしても、一番大事な物事を決めるのは武士だったわけですね。鎌倉時代には、鎌倉幕府は、やりたくてやっていたわけじゃないのですけれども、好きなだけ、天皇を位から引きずり下ろして別の天皇に変えることができました。室町時代には、北朝は室町幕府が建てた朝廷なので、室町幕府の言いなりです。江戸時代を顧みても紫衣事件（しえじけん）とかさまざまにありましたし、あと、諸外国と条約を結ぶとき、誰が条約を結ぶことを決意するかというと、まずは江戸幕府が決意するのですよね。それに対して、京都の朝廷が「駄目だ」と言うから幕末は荒れていくわけですが、それですけれども。

とにかく日本の支配権を武士が持った時代が700年ぐらい続いた。その武士がどこから、どうして生まれてきた何者なのかが分からないということは、日本史の半分が分からないということと同じことだと思えるのです。歴史が全て支配者の歴史ではありませんし、武士たちの歴史が日本史ではありませんが、それにしても、近代になるまでの700年ぐらい、この国に君臨してさまざまな文化を良くも悪くもリードしてきた存在が、どこからどうして生まれたのか分からない。あるいは、「結局、都の文化でしょ、天皇さんの文化でしょ」で片付けていいのか。その辺りが、どうも私、自分で納得できなかったのです。そういうこともあって、ちょっと調べてみたわけです。

今回は時間も限りがあるので、武士がいかんして生まれてきたかという、そこだけ申し上げます。本来ならば千葉氏に関連付けて申し上げるべきなのですが、千葉氏もまた武士であるということと、後ほど申し上げますように、初期の武士たちの大事な戦、特に平将門（たいらのまさかど）の乱であるとか平忠常（ただつね）の乱が、明らかに千葉を含む、東関東といったらいいのでしょうか、その地域を舞台にして起こっています。面白いことに、神奈川県とかあの辺は、関東なのに武士の成立とほとんど関係がないのですけれども、太平洋に面した千葉県、茨城県辺りがどうも初期の武士にとって大事な場所なのです。なぜ、そうであるのかということも含めてなんですが、やはり武士は坂東でないと成立しないだろうと私は思った次第なのです。

ただし、これは話としては簡単ではなくて、坂東だけで成立したわけでもない。都から下ってきた人間がいます。だから、二者択一で考えるから失敗するのです。「しよせん、都の文化でしょ」という考え方も間違っているし、「坂東だけでできたでしょ」という考え方も間違っている。どうも両方の文化が混ざり合っていて、混ざることによって、ある種の化学反応が起こって、どちらにもなかった性質、武士という新しい時代の要素ができたのだと考えるに至ったわけです。

王臣子孫の爆発的な増加

一番初めに、まず、どんな人たちがいかなる理由で都から下ってきたかをお話ししたいのです。きょうは、機器などの都合で、あまりスクリーンが明るくなくて、見にくくて恐縮なのですが、お手元の配布資料、また後ほどゆっくりご覧いただいて、もしよかったら私の著書も読んでいただいて、根拠等は確認していただきたいと思います。

都では基本的に貴族社会がございます。その貴族たちは根本的にどうやってご飯を食べているかという、位階（いかい）と官職（かんしょく）というものによって地位が定められ、それ相応のサラリーをもらうわけです。そこで、この貴族制度に根差してご飯を食べている人たちというのは限られていまして、大体、皇族と、それからその皇族から分かれていった源氏や平氏、もともと皇族ではありませんが、奈良時代ぐらいから朝廷を牛耳っている藤原氏（ふじわらし）。この辺りに限られてきます。

皇族を養ってするための予算は限られていて、あまり人数が増えると食べさせていくことができない。そういう事情がありますので、どんどん末端の人間を皇族から格下げして一般人にしていくわけです。それを臣籍降下（しんせきこうか）といいます。『大宝令（たいほうりょう）』では天皇の子どもたちは無条件に親王（しんのう）・内親王（ないしんのう）となります。今日と同じですね。親王の子どもは無条件に諸王（しよおう）、つまり何々王となるわけです。例えば秋篠宮家の悠仁さんも、現在のルールでは悠仁親王となりますが、『大宝令』では悠仁王となります。あるいは佳子内親王も同様に佳子女王となります。親王・諸王というランクがあって、ある程度以上世代を経ると諸王のまま、あまり上にはい上がることができません。ある段階で見切りをつけて、姓をもらって臣下に下がります。例えば、これはほとんどの方がご存じのことと思いますけれども、桓武（かんむ）天皇の子孫は、ある段階で「平」という姓をもらって平氏となっていくわけですね。あるいは、清和（せいわ）天皇の子孫は、ある段階で「源」という姓をもらって源氏として生きていくということになります。

源というのはそもそも中国の姓らしく、「皇帝の一族と源を同じくする」という意味で源という姓が中国で生まれて、日本ではどうもそれをまねしたようです。平という姓についてはほとんど、何に起源するのか、一般には説明されないのですが、私はいろいろ調べた結果、「平安京をつくった桓武天皇の子孫」、その「平」の字だろうと私は考えています。

そうして、何らかのゆかりのある字を姓としてもらって臣下に下って行って、活動していくわけなのですが、最初は彼らも、皇族から離れても、貴族としての待遇がある程度は保障されているわけですね。貴族になると、まず、位をもらいます。位階といいますけれども、人間それぞれに数字を付けて、一位の人間が一番高く、そこから一位、二位、三位（さんみ）、四位（しい）というふうに、天皇から遠くなるほど数字が上がっていきます。位というのは、要するに天皇との距離の近さを人間の価値だと判断するものさしでして、原点である天皇に近ければ近いほど数字が低い。だから、身分が高いということになります。ちなみにこれは日本独自のシステムでして、人間そのものに数字を付けて人間の価値を可

視化するというのは、中国人はやらないことですね。

官職のほうは中国にももちろんありますけれども、天皇に奉仕する役職、どんな仕事をして天皇に奉仕するのか、身分相応にいろんな仕事があります。ただし、任期があるので定期的に就職活動をしなればいけないわけですね。終身雇用という発想がありませんので、この辺りが平安時代のなかなか厳しいところですね。実態としては貴族制です。貴族制というのは本質的に生まれが物を言います。つまり、良い家に生まれた人間は一生良い人生を送れることが保障されている、これが貴族制です。だから本当は、こんなこと起こるはずないのですね。貴族社会で就職活動をしないと食っていけないというのは、本来の貴族社会に反するわけです。

なぜそうなったかという、中国の官僚制を中途半端に取り入れたからですね。時代によりますが、中国は完全な官僚制。つまり、今日の国家公務員試験と同じです。能力のある人間を、特に宋代以降は科挙（かきよ）という国家試験がありますから、能力のある人間に国家試験を受けさせて、パスした人間を採用していくという社会なのですが、その官僚制を日本に導入しながら、でも、導入し切れないのですね。なぜなら、わが国は根本的に貴族制社会であり、血統が物を言う。その中途半端な仕組みがぐちゃぐちゃになってしまって、平安時代、摂関家とか、源氏の上のほうとか、生まれが良い人間は良いのですが、末端の人間は貴族社会に生まれていながら貴族制に一生を保障されないという、かわいそうな状況になります。大河ドラマなどでも描かれていると思いますけれども、就職難というのはそういうことですね。仕組みがきちっとしてないので、はざまに立つ人間が困るということです。

要するに非正規雇用の人間とあまり変わりませんけれども、就職活動をしよっちゃうしなないといけません。もちろん就職活動は落ちることがありますので、無職の期間というのが生じるわけですね。ここに位階とか官職の模式図を挙げたのですが、お手元の資料にも印刷してありますし、どこにでもある表なので、今はそういうものがあるのだということだけご覧いただければいいのです。この表を挙げた趣旨というのは、それぞれの位階に対してサラリーが決まっているということです。こういう位の人間にはこれだけの年収を保障しますということがルールで決まっている、そのことだけお伝えできればいいわけです。ちなみに官職も同じで、こういう官職に対してはこういう俸禄（ほうろく）、サラリーが与えられますよということがルールで決まっている。

じゃあ、なぜ食いはぐれるのかということなのですが、朝廷にはいろいろな官職があって、太政官というものをトップとして、いろいろな役所がぶら下がっていますということだけ、お伝えしたいわけです。一応、ピラミッド型になっておりまして、この太政官の下に八つの省がぶら下がっていて、八つの省の下にたくさんの役所がぶら下がっていて、それぞれ上下関係がきっちり決まっています、国家を運営している建前にはなっています。

この建前は、あっという間に崩れる。というより、もともと機能していませんでした。歴史の授業で、日本というのは律令制（りつりょうせい）を導入したと習いますよね。律令制、きっちりとしたシステムチックな官僚制。高度に洗練されて、組織化された官僚制。これを

導入したのだけど、だんだん崩れていって中世になった、という説明をしばしば聞きますけれども、古代から中世をずっと通して歴史を見てみると、やはり実態はそうじゃないですね。律令制というのはちゃんと機能してから崩れたのではなくて、一度もちゃんと機能したことがありません。そもそもわが国には向いてなかったのです、中国的な官僚制度というものは。形だけ、ファッションとして取り入れたは良いのだけれど、わが国の社会の根本が律令制に合っていないので、一度たりともまともに動いたことはなかった。奈良時代も平安時代もです。動いているように歴史書には書いてありますが、しかし、末端の現場で起こっていることをいろいろ見ると、これは、機能しているとは言えない。ちゃんと機能した日って1日でもあったのだろうか、と私は思っています。

そういう律令制が一応、建前としてはあって、そこに一応、給料というものが付いてくるわけですね。それぞれの役所の中にも四等官制といって、これも学校の歴史の時間に習うと思うのですが、長官（かみ）、次官（すけ）、判官（じょう）、主典（さかん）、上から順番に、偉い順に肩書があって、それぞれで色々な字で書くのですけれども、役割とお給料というのが身分に応じて定まっているということになります。位階と官位もそれぞれ、実は対応関係があって、こういう表のようになります。

この貴族社会の構成員を、「王臣家（おうしんけ）」とか「王臣子孫」といいます。王臣家というのは天皇家や貴族の上層部。きちんとした定義が、探すとあるようでして、五位以上がここに含まれるといわれています。一般にも五位という位は、貴族の末端としてぎりぎり成立する地位と認識されていまして、ルール上はこれ以上の人間を貴族といえます。狭い意味では三位以上の人間を指すこともありますけれども、その辺りは今日のお話ではあまり重要ではありません。この王臣家、それから、それに院とか宮と呼ばれる人間。院というのは通常、太上天皇とか天皇を辞めた人、あるいはそれと同等の待遇をもらう人が院と呼ばれて、あとは天皇のキサキ、つまり皇后とか中宮とか、また親王などは当時、「宮」と呼びましたので、併せて院宮（いんぐう）といえます。

この院宮王臣家というものが、大体、平安時代の初めぐらいに社会の上層部をだんだん埋め尽くしていくのです。その実態は何者かという、皇族と、あとは臣籍降下した直後の源氏や平氏、あるいは飛鳥時代の末ぐらいから朝廷を牛耳ってきた藤原氏ということになります。その子孫を王臣子孫といえます。どこまでが王臣家で、どこから先が王臣子孫なのかがよく分からないのですが、一応、王臣家が五位以上と書いてあるからには五位に上れなかった、その子孫たちを本来指したのだと思われまいます。この辺りもざっくりした理解で構いません。多分、本人たちもあまり意識してないので、とにかく王臣家の子孫と、ただそれだけ理解すればよいと思います。諸王、つまり皇族の末端、それから源氏、平氏、藤原氏などがこの人たちに含まれます。この人たちが武士をつくり上げていく。それはなぜかというお話を、今日、申し上げたいのです。

簡単に言うと、王臣子孫が増え過ぎたということです。これは学校教育でも教えているかもしれませんが。私は中学校で習った記憶がありますが、臣籍降下というのは基本的に、皇族

の数が増えてきたので、皇族を賄うお金では食べさせていけない、そこで、皇族から独立させて、「自分で働いて自分で食べてね」と。大納言とか、そういう地位に就けばサラリーはもらえるので、皇族としての特別待遇、今で言うところの、例えば宮内庁の予算ではない別の予算で食べていってください、ということだと思のですが、そうして切り離されていくのです。

ただ、私も子どもの頃、思ったのですが、皇族が増えていくと言ったって、でも、世代がたてば増えますし、亡くなる人間もいますし、数にそう変わりはないのではないかと思っていたのです。ただ、当時の史料を見ると、皇族が増え過ぎて困るということがそこかしこに書いてあって、そんなに困るのだろうかと思って、私、数えてみたのです。皇族の人数が増えるとしても、国家公務員のポストの数は増えません。椅子取りゲームなのですが、ゲームに参加する人間がどんどん増えるにもかかわらず、椅子の数が増えないわけですから、この椅子取りゲームが熾烈になっていくわけですね。どれくらい熾烈なのだろうと思って、私、これ、本では書いたことがないのですが、今回、ちょっとお話しさせていただく機会があったので、ここを頑張ろうと思って頑張って数えました。桓武天皇という、たった1人の父親から何世代経て、どこまで人が増えるかということを、ぜひ実感していただきたいのです。

これは信頼できる数字で、皇族と貴族の最も信頼できる系図の人間を全部、めくって数え上げて、データに打ち込んで系図にしました。それがどのような伸び方をするか、今、ご覧いただきたいのですけれども。桓武天皇を第1世代とすると1人ですよ。この1人がどうなるかってお話なのですが、この桓武天皇に対して35人、子どもが生まれます。たった1人の人間が、息子と娘、全部合わせて35人。この増え方をすると確かに大変なことにはなるだろうなと思うのです。他の人たちなども見ていきますと、これ、全部、数字を振っていったのですが、赤い数字はそれぞれのきょうだいの中の生まれ順です。誰の子どもかというのが変わるたびに数字は振り直されていくのですが、青い数字は桓武天皇から通し番号で付けています、生まれた順、系図順にですね。そうすると桓武の長男の平城（へいぜい）天皇、これはまだいいですね。7人しか子どもがいません。あるいは桓武の子どもの淳和（じゅんな）天皇が13人。今から見れば多いですけども大した数じゃないですね。あるいは仲野親王（なかのしんのう）という人がいますけど、この人は16人、子どもがいます。

ところが、世の中にはすごい人がいて、桓武天皇の2代後が嵯峨（さが）天皇。この人の子どもの数、後に仁明（にんみょう）天皇になった人も含めて、数えていくとどんどん増えていって、すさまじい数です。50人です。1人のお父さんが50人、子どもをこしらえたのです。いろんな意味ですごいですよ。少子高齢化といわれる中で、同じ日本人とは思えない子どもの増え方です。子どもをつくる能力というのは、多分、先天的な才能があるでしょうから、その才能に恵まれたというのはあるでしょうけれども、単なる才能だけで、好き勝手に暮らしているだけでこうはならないですね。全力を尽くしている形跡があります。つまり、国家の帝王としての役割、責務だと思って子どもをつくっています。桓武天皇とか嵯峨天皇を見ると、子どもはできちゃったのではなくて、つくる努力をしていますね。つ

くればつくるほど王朝の繁栄に直結するという考え方がどうやらあったらしく、朝廷というシステム全体が全面的にバックアップして、帝王がたくさん子どもをつくれるように。帝王自身も、すごく熱意のある天皇たちですから、すごく頑張りましたね。私の知る限り、確か、江戸幕府で徳川家斉（とくがわいえなり）がもっと子どもをつくったような気がしますが子ども、発想は同じですよ。將軍の仕事は子どもを「産めよ、増やせよ」という、その一点に集約されていく。そういうときが日本史では時々、波として来るようです。

他にも、今の嵯峨天皇の子どもで、天皇になった仁明天皇。この人、頑張ったのですけども24人しか子どもができなかったですね。皇族としてはあまり頑張り切れなかった。だけど、その子ども、文徳（もんたく）天皇はもうちょっと頑張って33人、子どもをつくりました。それから、文徳の弟の光孝（こうこう）天皇、この人は頑張りましたね。45人、子どもをつくりました。源氏の先祖になる清和天皇が19人。そこそこですね。それから、さっきの光孝天皇の息子の宇多（うだ）天皇、この人が22人。宇多の息子、醍醐（だいが）天皇が39人という感じで子どもをつくっています。もういい加減うんざりされたかもしれませんが、もうちょっとだけ言うと、醍醐の子どもの村上（むらかみ）天皇が19人、子どもをつくっていますね。などということ各世代でやっていくとどうなるのでしょうか、ということをお見せしたいわけです。

先ほど申し上げましたように、桓武天皇一人に対して、子どもの世代、第2世代で35人、子どもができます。その子どもの世代、桓武から見て孫の世代にどうなるかということ、142人になります。その次の世代で248人。ひ孫ですね。やしゃごの世代で427人。次の世代で604人。ここで500の大台を超えます。次の世代で811人。次の世代で1067人。桓武を第1世代として、第8世代で、たった1人の父親から1000人の子孫が生まれます。これは、皇族のどの男性から子どもが生まれたかしかカウントしていません。つまり、皇族の女性が産んだ子どもをカウントしていません。系図に残っていないので仕方がないのですが、男性だけ追跡しても、これだけ子どもをつくっていくわけですね。私はしょっちゅう、これをねずみ算にたとえるのですけれども、あのペースで子どもをつくっていくと、あっという間に、たった1人の天皇から1000人以上の王臣子孫になるわけです。

このペースで増える中、朝廷のポストが一つも増えないわけですね。もともと少ない人数で回っていた組織のはずなのに、やたらと天皇家が頑張って子孫をつくるものですから、座る椅子がなくなってきました。これは源氏、平氏まで数えています、皇族の子孫なので。ただし、藤原氏を数えていません。皇族の横に、さらに藤原氏という、これと同じような増え方をする一族がいて、その人たちも数世代すれば2000人とかになるような、そういう人たちがいるわけです。朝廷のポストは、数がないわけではないのですが、やはり末端のポストには生まれの良い人は就けないですね。そういうことを考えると、この人たちが座って良い椅子の数というのは、300あるかないかだろうなという気がします。厳密に数えたわけではないのですけれども。今回も私、これ、1067人、数えるので精いっぱいだったので、ここまででした。しかも、これを作るのに結構時間をかけたのですが、ここで力尽きました。ただ、

様子は何となく分かっていただけるのだと思うのです。人の増え方が。私たちが授業で、『皇族が次第に増えたので』、この『次第に増えたので』という言い方がくせもので、大した増え方はしないと思うのですけれど、われわれの常識を逸脱した増え方をします。

そこで、この食べなくなった人はどうなるかという話ですね。今日でも時々言われますが、自己責任というやつです。「われわれは君たちを養うことはできない、自分の責任で頑張っ

て食べていってね」と言われた人間は、その後どうなるのでしょうかということですよ。当然、みんながお行儀よく食べていくわけじゃないということです。限られた資源をみんなで取り合っていくわけですね。単に人数が増えただけならば、1人が1000人に増えても、日本全体の人口を考えればたいしたことはないのです。ただ、彼らは生まれが良いので生活レベルというものがあります。単に食えれば良いということではなくて、自分の生活にふさわしい、身分と生まれにふさわしい服装、食品、それから従者、乗り物、さまざまなコストがかかります。例えば王臣子孫だったら植物繊維の衣服を着るわけにはいかないですね。どうしても絹の衣服を着るべきだと思いますし、食べ物だってあまり粗末なものを食べるわけにはいきません。牛車もないわけにはいきませんが、牛車って高いのです。調達費も維持費もものすごく高い。人間、生まれの良い人は、自分一人では靴ひもも結べないなんてよく言いますが、そういうことなので、身の回りの世話をする人間が必要ですね。身分に応じて従者の数というのは一定数そろえないといけません。この人件費がばかになりません。

そういうこと考えると、単なる1067人じゃないのです。日本人の平均よりはるかにコストのかかる1067人ということになります。非常に限られた富を、この人たちが奪い合うことになりました。その結果、どうなったのでしょうか、というのが今日の大事な話になるのです。都では食べられません。都というのは徹底した消費地です。あそこは消費する人間しか住んでいません。びた一文、生産する人間がいません。工業をやる人はいますよ。ある原料を加工して製品にする人間はいますが、例えば稲のように1粒植えたら何百粒も生えるような、そういう意味での生産活動をする人間が都にはいません。それが都のそもそものプライドというか存在意義でして、あそこは生産する場ではなく、他人に生産させたものを消費する場所です。なので、これだけ増えた人間を養うことができません。当然、彼らは生産現場に行って、都に流れてくる前の物資を横取りするしかないわけですね。

都というのは、日本中からいろいろな生産された物資が流れ着く川の一番河口側と言ったら良いと思うのです。いろいろなものが上流から流れてくるのですけれども、流れてきたものだけでは食えない。そうすると、みんな、上流にさかのぼって、できるだけ川の水源に近い所にさかのぼって取れるものを取っていく。彼らは気付いたわけです。下流にいて、おいしい何かの流れてくるのを待っていると自分の取り分が流れてこない。そこで、自分の足で取りに行くということを知ったのです。これまで貴族は都にふんぞり返っていて、地方から流れてくるものを待っていれば、おいしいものが口に入ったのですが、それじゃ駄目だと気付いた人たちが、初めて自分の足で生産現場に行って収奪する。自分たちでは作らないの

ですけれど、同じ略奪なら生産現場のほうが効率よいということで、現場に行きます。ただし、彼らは生まれが良いのだけれども、ただそれだけの人間ですから、それだけどううまくいかないのですね。そこで誰と手を組むのかということになっていきます。

指揮官や戦士のプロとしての武人輩出氏族

そこでもう一つ、同じ頃、朝廷で食い詰めつつあった人たちがいます。私が「武人輩出氏族（ぶじんはいしゅくしぞく）」と呼んでいるのですけれども、指揮官や戦士のプロフェッショナル。たくさん関連資料はあるのですけれども、ちょっと大事なキーワードだけ申し上げますね。これもある種、血統の問題です。元慶（がんぎょう）2年、878年に元慶の乱という大規模な蝦夷（えみし）の反乱が起こります。その蝦夷の反乱に対して、「それを鎮圧しなさい」と言われた源多（みなもとのまさる）という貴族がいます。多は大納言（だいなごん）ですが、陸奥出羽按察使（むつでわあぜち）という、現地の治安維持に責任を持つ立場にいました。もともと、そういう地位にいたのです。そのため、「蝦夷の反乱が起こった今こそ君の出番だ、頑張って鎮めてらっしゃい」と言われたその瞬間、多は辞任したのですね。今、働かなくて、いつ働くのだから話ですけれども、平和のときはずっとこの地位にいたのですけれど、戦争が起こると辞めたのですね。何故と聞いたら、「臣、族は将種（しょうしゅ）に非ず、門は兵家を謝す」と書いてあります。つまり、「私は生まれが將軍を出す一族ではありません。私の家をつわもの、ソルジャーの家ではないのです」と言うのですね。つまり、戦う訓練も受けていないのと、あと、大事なのは「種」という言い方です。「将種」。つまり、種族、血統のことですよね。戦う技術や能力というのが血統単位で当時、形成されていた。さらに言うならば、「兵家」と言っているわけですから家単位で形成されていたということです。その血を受け継ぎ、その家に生まれた人間が戦いを仕切るプロフェッショナルなのであって、私はそもそもそういう生まれじゃありませんと。確かに、言われればそのとおりですね。そういうことを、この資料を紹介することによってお伝えしたいわけです。

遺伝と環境、どちらが人間の能力を形成するかというのはいろいろな考え方があります。私もこういうことを本に書いて恩師に送ったら、感想の電子メールが返ってきて「面白かったのだけれど、ちょっと遺伝を強調し過ぎじゃないか。あくまでも人間というのは教育によって能力が開花するのだ」ということを言われて、私と意見が全然違うので、どう返事したらいいのか分からず、返事をしないままになっているのですけれども。残念ながら（残念ながら分かりませんが）今日の遺伝学、生物学等の自然科学において、人間の性質が遺伝によって固まる部分というのは、確かにあるのだということは否定し得ないですね。私、そういう自然科学にも興味があるので、そういうニュースを追い掛けるのですが、人間の全てが遺伝で決まるわけではありません。ただし、遺伝によって決まる部分は確かにあると言わざるを得ないですね。成長していくに従って、環境の及ぼす影響が大きくなるので、遺伝でついた差は一定年齢以上で埋まるのだという説もありますが、しかし、世の中を見渡してみると、逆立ちしても勝てない天才というのはいますよね。

私も同じ歴史学者で、いろいろな人と研究したり、付き合ったりしますが、「この人は崩し字を読むために生まれてきたのだな」という人がいて、私がどれほど努力しても太刀打ちできない。私にはどうしても墨の模様にはしか見えないものが、この人には字に見えるのです。私には、というか、誰にも読めないのですよ。誰にも読めない墨の塊を、この人が見ると字として判読するのです。これは天賦の才というしかなくて。私が努力すれば追いつけるのでしょうかけれども、その頃にはこの人はもっと先に行っているでしょうから、永久に追いつけない。そういう才能の差を感じることがあります。アスリートなんかもそういうところを感じます。もちろん、遺伝が全てを決めるわけではありません。別に、長嶋茂雄の息子が優れたプロ野球選手になったわけではないのと同じように、天才の子どもが天才とは限らないわけですが、しかし、遺伝的要素というのはあります。

家単位でやることの良いところは、遺伝的資質をある程度、期待できるだけでなく、教育環境も家で提供するということです。当時は学校の類がありませんから、教育は家で行います。特に専門技術、例えば文書を読み書きする能力とか、儒教の知識であるとか、あるいは敵と戦う能力、そういったものは生まれたその瞬間から、その家でたたき込まれていくわけですね。最も近いのは今日の家元制だと思います。茶道でも良いですし、歌舞伎役者でも良いのですけれども。歌舞伎役者に生まれた子どもが、例えば4歳とか5歳で初舞台を踏む。あの段階で徹底的に、身体、所作、心構えがまずできてから歌舞伎を教えるのではなくて、人間としての成長と同時に、歌舞伎役者としての考え方や所作をたたき込んでいくわけですね。身体化されている。そうすると、あの年齢、幼稚園児ぐらいの年齢で初舞台が踏めるということになるのですが、武士も全くそのとおりです。

これは、成長してからでは遅いのです。敵と戦うのに一番大事なものは、技術もさることながら心構えです。これは武士の史料を見ていると散々出てくることです。後に鎌倉幕府が滅亡する頃に、後醍醐（ごだいご）天皇がいろいろな荒くれ者を集めて戦のまね事をしたがる。実際に戦をするのですけれども、当時、兼好法師（けんこうほうし）（ト部兼好・うらべのかねよし）が鋭く分析しています。兼好法師が『徒然草（つれづれぐさ）』で書いているのですけれども、「武士と、そうではない人間の違いというものは心構え。どれほど武器を振り回して、荒くれ者が腕力が強かったって、戦争の現場に出たときに心構えの違いが露骨に出る。だから、そこら辺のチンピラと、生まれたときから武士として鍛えられた人間は、戦場に出ると全く使いものになる度合いが違う」というようなことを、兼好法師が言っています。明らかに後醍醐の一派に対する当て付けですが、それが当時の認識だったわけですね。その〈家に生まれる〉ということは、とても大事なことであります。

そういう家を探していくとたくさんあって、例えば小野春風（おのはるかぜ）っていう人がちょうどこのときに起用されますけれども、この小野家はそういう、代々、訓練を積んできた。「累代の将家」という言葉がありますね。代を重ねた将軍の家。「累代の将家」という言葉を、ぜひお見せしたくて、今日、このスライドに入れたのです。やっぱり世代を重ねることが大事なわけですね。このプロのすごさというのは戦うだけが能ではないとい

うことですね。指揮官の最大の能力というのは戦わずして勝つということであって、現場で武器を振り回すだけが将軍の資質ではないわけです。人間、手元に強い武器を持っていると振り回したくなりますけれども、そうではいけないわけですね。

当時は、大多数がアイヌから成る蝦夷との戦争が、奈良時代の末から平安時代にかけてずっと続いていました。その中で、常に戦場の現場で、この将軍の家に生まれた子どもたちは育つのですね。どうなるかという、アイヌ語を覚えるわけです。アイヌ語を覚えて、アイヌ人と直接語り合うことができるのですね。今でもそうですけれども、異文化の中に飛び込んでいくときに相手の言葉を覚える努力をすると、少し相手のこちらに対する当たりが柔らかくなりますよね。関東人も、大阪に行くとお阪弁を覚えるまでは仲間と見なされないとよく言いますが、それと似たようなところがあって、相手の言葉を覚える努力をするというのは、相手から心を許される一つの大事なポイントになる。そうすると、しなくていい戦争というのがありますよね、お互い、きちんと理解し合えればしなくてよかった戦争、それをしないで済む。やみくもに戦う必要がなくなる。そこまで含めてのトータルな戦をマネジメントする能力が将軍の家ということになって、小野一家などはそういう能力を持っています。

それから坂上氏（さかのうえし）がそうですね。この後も山ほど坂上氏の史料が出てくるので、ほとんど割愛しますが、「将種」とか「家風」という言葉が出てきます。やはり当時、戦いのプロというのは、その家に生まれることが最低の条件として必要だった。これが世代を重ねれば重ねるほど、ものすごい能力を持った人たちが量産されていくわけです。もちろん、この坂上氏から後に田村麻呂（たむらまろ）が出てくるわけですね。蝦夷との戦争で最も活躍した坂上田村麻呂というのは、奈良時代からこうした現場での訓練を、それから、家での教育を積み重ねてきた、そういう結晶とすることができます。

強さを支えた弓馬術

一つ、重要なことをこの辺りで申し上げますと、当時の戦う技術は「弓馬」です。弓馬というのは騎射、つまり、馬に乗って弓を射る能力のことを指します。侍が剣で斬り合うというのは、はるか後世のこと。極論すれば、それって近代のことじゃないかというような気がしているぐらいです。江戸時代の侍も時々、斬り合いをしますけども、平和な時代ですから斬り合いが下手ですね。当時のあだ討ちなんかの検屍の記録などを読むと、一発で相手を仕留めてあげればいいのに、お互いにへっぴり腰で斬り合うものだから、どんどんけがをして、すごく痛い死に方をしたのだらうなと思うのですけれども、戦いは本来、刀でやるものじゃありません。今日、すぐ近くにある千葉県立中央博物館でちょっと展示を見てきたのですけれども、そこで太刀、いわゆる、われわれが日本刀と呼ぶものは当時、太刀と書いて太刀と言うのですけれど、驚くほど短いですね、太刀というものが。明らかに斬り合うための刀ではないなというのを、思った次第です。

武士、あるいは、この将種に生まれた人たちがなぜ強いかというと弓馬術があるからです。

私がいろいろ考えて調べた結果、鉄砲伝来以前に、最強の武士はやはりこの弓馬術と考えて良いと思うのです。単なる弓術でも強いわけですが、これを馬術と組み合わせるとすさまじい強さになります。当時の戦というものは、源平時代ぐらいの戦い方で言うと、まず、遠矢といって、遠くから弓を当てずっぽうに射て、何人か敵の数を減らしておきますよね。それが終わったら、入り乱れて乱戦になるわけですが、この弓馬の術というのは、馬に乗って敵の至近距離に接近して、矢をたたき込んで去っていくという、ヒット・アンド・アウェーの形でやるわけです。そのために、流鏑馬（やぶさめ）という技術が武士の間ではとても重要な技術になるのですけれども、できるだけ遠くから接近しながら、相手が自分の存在に気付く前、敵がやってくるぞと気付いたときには手遅れのような機動力で接近してきて、しかも、敵の武器のリーチよりは遠い所から矢をたたき込むということですね。致命傷を与えるということです。この馬術がとても大切です。馬というのは生き物ですから操縦が難しいのですけれども、敵もまた鎧を着ていますから、どこでも当てれば良いというわけではなくて、急所があるわけです。その急所を、いかに敵に見せないように逃げるかというのが逃げる側の技術ですし、相手は、いかにその相手が逃げる前に、急所に矢をたたき込むかというのが大事な問題になってくる。この技術を身に付けると、歩兵は全く敵ではないわけです。

奈良時代に、蝦夷の強さについて語った記述がありますけれども、「蝦夷というのは弓馬術を使うので、朝廷の歩兵が10人、束になってもかなわない」とはっきり書いてありますね。そもそも、なぜ蝦夷が馬術を持っているのか謎なのですから。馬術というのは、明らかに朝鮮半島から来ていますので、西から来たはずの技術が、なぜ本州を通り抜けて、アイヌの得意技になっているのかというのは、実はすごく疑問なのですが、今そこに踏み込むと時間がなくなるので、そういう謎があるということだけ申し上げておきます。

蝦夷はこの弓馬術に、非常に秀でていました。日本の朝廷側も、またこの技術で対応しないといけないのですが、要するに歩兵は敵ではないということです。どれほど集めても烏合の衆です。一つだけ、その証拠になることを申し上げると、中国という超大国がありますよね。隋（ずい）とか唐（とう）とかが朝鮮半島の国をよく攻めるのですけれども、朝鮮半島の北のほう、今の北朝鮮に高句麗（こうくり）という国がありましたね。あの高句麗に対して、中国は一度たりとも勝てたことはありません。最後の最後、勝つのですが、それは高句麗が勝手に内部から分裂して崩壊していったので勝ったのです。正面衝突で本気で戦って、隋や唐が高句麗に勝ったことは一度たりともないのです。それは、要するに高句麗が騎馬民族だからであり、中国が歩兵の寄せ集めだからですね。30万人集めようが、100万人集めようが、高句麗には勝てません。ある記録によると30万人、隋の軍を集めて高句麗に攻め込みました、帰ってきたのは3000人だったと言っていますね。全く敵ではないわけです。そういったことの中で弓馬術を身に付けるというのは、単に人よりちょっと強いではなく、ずばぬけて強い。他の技術では対抗できない技術になるということです。

王臣子孫と武人輩出氏族との出会い

それと、指揮官としての能力を小野とか坂上は持っているわけですが、しかし、彼らの待遇が低いわけです。日本も中国もそうですが、武官に対する待遇というのが伝統的に低いですね。安全な都でふんぞり返っている人間のほうが、戦場で命を危険にさらしている人間より報酬が高いというのが日本の朝廷のシステムですので、命懸けでこのプロフェッショナルな技を磨いてきた割に報酬が低い。田村麻呂は大納言になりますが、その大納言などの地位をさっきの王臣子孫がどんどん占有していくと、坂上とか小野は生きていく場所がなくなるわけです。さあ、どこで生きていきましょう。となると、都で生きていけないのだから地方で生きていくしかないよね、ということになって、地方に流入します。そこで、さっきの王臣子孫と出会うことになるわけです。この二つの勢力が合流することで、生まれは尊いけど何もできない王臣子孫、それから生まれは大して尊くないのだけれど、戦わせると剽悍無比の、この将種といわれる坂上、小野、あと、他にも多治比（たじひ）とかいろいろいるのですけれども、そういう連中がお互いの弱点を打ち消し合って、「手を組んだら俺たち最強になるのでは」ということに気付き始める。融合し始めてしばらくすると、他の要素がもう一つ参加してくるのですが、そうすると武士というものが生まれてくる。そういう道筋が見えてくるのですね。

いろいろと余計なことを申し上げてもいますけれども、何が言いたいかと申しますと、武士は何もないところから生まれてきたわけではないということなのですね。昔、私が習ったことは、草深い田舎に農民がいました、この農民たちは生産力が上がったので余剰の富をため込むようになりました、その余剰の富を守るために自衛することになり武装しましたという、見てきたような話が語られるのですけれども、これを裏付ける話が全くないのです。中世の武士を見ていて、この人、百姓出身だなと言える人は一人たりともいないですね。階級が全く違います。

民というのは生産する側なのですけれども、武士は徹底した消費者ですね。自ら生産することはありません。あくまでも他人の生産物を搾取する側が武士であって、ここにどうしても越えられない一線がありますね。農民が自衛するというのは、まるで武士がスーパーヒーローのように、武士の存在を正当化する言説だったのだなとつくづく思うわけです。何も持っていない民が武装するのはどういうときだろうと思ったときに、自分を守るために自衛する、それは一理あるのですが、平安社会を見ていると全くそうは思えないですね。人が武装するのはどういうときか。他人の富を奪うときですね。防衛的な武装、そういう発想はもしかしたら現代的な発想にすぎないのかもしれないとっていて、人がまず武器を手にとって暴れ始めるのは他人の富を奪うためではないのか。それは、正しいか正しくないかではなくて、人口を維持する富が足りない社会ならば当たり前ですね。

私は、日本の儀礼というのがどこからどう渡ってきたのかというのに興味があるので、朝鮮半島の歴史、中国の古代の歴史なども調べています。古代の朝鮮半島では、毎年、戦争し

ています。あの人たち、侵略戦争がしたいわけじゃなくて、でも高句麗と百済（くだら）と新羅（しらぎ）で毎年のように戦争するのですよ。敵地の奥深くまで戦争で攻め込んで、侵略して、勝つとどうするかっていうと引き上げていくのですよね。土地が欲しいわけじゃない。その意味では侵略戦争じゃないのですけれど、なんで戦争するかというと、土地なんかどうでもいいのです、人間をかつさらっていくのですね。彼らは労働力が欲しくて戦争をしているのです。土地は目の前にいくらでもあるのだけれど、この土地の生産性があまりに低いので、労働力の数で補わなければ国家を回すことができない。だから、他国から労働力になる奴隷を取ってくるために毎年、戦争をして、労働力の奪い合いをしています。

その中に倭国もかつて参加したことがありますけれども、食うために戦争が必要だったのですね、東アジアでは。特に朝鮮半島では。わが国がどうだったのかというのはなかなか難しいのですけれども、守るための自衛というのは、あれは本当にどこかの誰かが机の上で考えついた神話でして、そういうことではありません。何もないところから生まれてきたのではなくて。武士の圧倒的な強さが鎌倉時代に一度、証明されましたよね。世界最強の元（モンゴル）軍を、海の助けがあったとはいえ、二度、はね返した。相手は遊牧民族、騎馬族ですから、間に海を挟んだということは、よほど大きなディスアドバンテージだとは思いますが、でも、日本が勝ったのが海のおかげだけとは言えないですね。上陸した元軍を現に蹴散らした形跡があるのですから、やはりそれなりの強さです。それは一朝一夕に身に付くものではなくて、磨き抜いた芸ですね。武士というのは本当に世代をかけて磨き抜いています。

その芸がどこから来たかということ、坂上とか、小野とか、文室と呼ばれる種族にそれを確認できるのですが。あと、この人たちは比較的、新興、新しい武人輩出氏族です。奈良時代ぐらいから幅を利かせ始めるのですが、より古い氏族としては大伴（おおとも）、佐伯（さえき）、紀（き）、多治比などという連中がいます。律令国家ができるはるか前から軍事力をもって、大王に奉仕してきたような人たちですね。その人たちが、よく見ると平将門の乱に姿を現すのです。平将門の乱では、将門と伯父の良兼（よしかね）が戦争していますけれど、その良兼の「上兵（じょうへい）」、多分、部下のトップクラスの指揮官級だと思うのですが、その中に多治良利（たじひのよしとし）というのがいますね。将門軍にも「陣頭（じんとう）」、恐らく上兵とあまり意味は変わらないと思うのですが、指揮官のクラスで多治経明（たじひのつねあき）というのがいます。他にも将門陣営を見ると文室好立（ふんやのよしたつ）とか、坂上遂高（さかのうえのみちたか）といった人間がいて、要するに、この人たちの実戦部隊の指揮官って、古代の氏族じゃないかということに気付いたのですね。これらは全部、『将門記（しょうもんき）』という将門の乱を描いた記録で確認できるのですけれども、ここで、私の中でつながったのです。彼らの武士の強さとは、どこから供給されたのだろう。繰り返しますが、源氏や平氏に生まれること自体は強さをもたらさないとはいえません。生まれが良いというだけであって、別に強さとは関係がない。どこかから持ち込まないと、あのようにはならないわけですね。どこから持ち込んだのだろうと思ったら、この人たちが持

ち込んだのだね、と私の中でごく自然につながったのですね。こういった複数の特色を持つ氏族が関東で合流することによって、武士という新しい勢力が生まれてきたと、私には見えてきたわけです。

これは系図をなかなか見せにくいので、詳しくはまた、その本、あるいはレジュメ等で確認いただきたいのですが、よく見ますと、桓武天皇の周りの人間に坂上とか多治比が入っていて、その血を源氏や平氏が継いでいるわけです。坂上田村麻呂からずっと、その血統をたどっていくと、清和天皇の奥さんになった女性にたどり着いて、その間に貞純親王が生まれて、その息子が源経基（つねもと）、つまり、初代の源氏になるわけですね。経基は、武士としての力量・業績は不十分だったので、その次の満仲（みつなか）の世代になると突然、大きな飛躍を果たして、武士のトップクラスに上り詰めるのです。この辺り、まだよく分かっていないところがあって、父親があれほど力量不足だったのに、どうして息子がこんなに才能豊かなのだろうかというのが、まだ解けない謎。これは、教育ではないですね、明らかに。教育のおかげなら父親がダメなわけではないですから。でも、遺伝といたって、こんなにトンビがタカを産むものだろうかと思って、私の中でまだ納得がいきません。

源氏と古代武人輩出氏族は血統でもつながっています。まず、最初に、婚姻関係でつながった後、婚姻関係が薄れていくと部下の集団に収まっていくのだなという流れが見えてくるのです。将門の乱ぐらいまでに、そういう流れがあった形跡が見えます。これは私がたどった、本当のかすかな形跡でして、この時期は記録が少ないものですから、なかなか多くの資料から言うことはできないのですが、一つ、そういう形跡を見つけたわけです。

都と地方のハイブリッドとしての武士

それだけではなくて、地方社会とのつながりがありますね。武士は、やはり地方で生まれたと考えざるを得ません。ただ、先ほど申し上げた武人輩出氏族と王臣子孫は、いずれも都の出身なのです。都から流れてきた、この要素がなければ地方で武士が生まれることはありません。その意味で、武士というのは都と地方のハイブリッドだと、私は著書で申し上げたのです。そう言うと、そりゃそうだろう、当たり前なことじゃないと言われるかもしれないのですが、具体的にこれとこれが都由来であり、なぜ、それが地方に流れてきたのかということを追跡する必要があるだろうと思ったのと、将門という初期の武士の一つの完成形の中で、そのプロセスがはっきりと史料の中に見えるのです。どういう道筋をたどったら将門という最強の武士団ができるのだろうと考えると、今、申し上げた筋道が一つ、有力な仮説ではないかなと考えているわけです。

ただ、外来の強い勢力が関東地方を制圧するとなったときに、どういう形でやったのかというのは考える価値があると思うのです。学者の中にも時々、軍事力で屈服させていったと言う方がいらっしゃるのですが、それは違うだろうと思うのです。一つは効率が悪過ぎるということです。出会った人間を片端から滅ぼしていく。それはモンゴル帝国（元）なら

そういうことできるかもしれませんが、倭人（わじん）はあまりそういうことをやらないですね。それから、現地を制圧するたびに敵を完全につぶしていくと、制圧した後、その土地の人材や生産能力が足りなくなってくるよ。現地の資源を温存しながら融合して乗っ取っていくというのが、効率のいい権力の広げ方に決まっていますから、やはりけんかではないだろう。いろいろ考えると、この時期、いろいろな証拠がありますけれど、婚姻関係と考えるしかないですね。都から下ってきた人間が現地の有力者に婿入りする、それによって現地の有力者の一派となり、その間に両方の血を引く子どもが生まれると、現地の勢力にとっては尊い血筋、つまり、中央とのパイプを持っている人たちの血筋が手に入るし、中央から来た人たちは血筋以外に何も持っていないのですが、現地のネットワークが手に入る。そのネットワークは人脈でもあるし、現地の百姓と直接向き合っている勢力ですから、生産現場を押さえるということですね。直接搾取できるということです。もちろん、現地にいろんなネットワークがありますから、人間、孤立して生きているわけではありませぬので、その社会に突然、よそから人が入っていくと駄目ですね。一世代じゃ無理です。

これは、私は本当に京都で働いたときに思いました。立命館大学で5年ほど働いたのですが、京都では3世代しないと京都人と認められないと言いますよ。その意味が分かりました。婚姻関係を結んで、同族になって、両方の血を引く子孫をつくらないと駄目だなと思った次第です。そういうとき、現地のネットワーク、京都もそうですけど、長いこと積み上げてきたネットワークというのは一朝一夕に横から介入することができませんので、やはり、ここでも婚姻関係で結び付く必要がある。

そのことに気付いたのは、最初期の武士である藤原利仁（ふじわらのとしひと）と秀郷（ひでさと）の系譜を見たときですね。秀郷のお父さんは藤原村雄（むらお）という人なのですが、お母さんが現地人です。「鹿島」と系図には書いてありますが、鹿島という姓が日本古代には存在しないので、何かの間違いだろうと思うのです。何かの間違いですが、「下野掾（しもつけのじょう）」と書いてあるので、現地の地付きの人間なのだろうと思うのです。このお父さんは誰から生まれたかという、下野史生（しもつけのししょう）、つまり、栃木県に当たる国衙の役所の下っ端の記録官だと思うのですけれど、そこにいた鳥取豊俊（とりのとよとし）という人の娘から生まれたらしいのです。この豊沢（とよさわ）は誰から生まれたかという、同じ鳥取一族、下野史生である鳥取業俊（なりとし）という人の娘から生まれたらしいということが、系図から確認できます。そうすると、この藤原秀郷、藤原氏を名乗っていますけれども、彼に流れる血の8分の7は現地人なのですね。たまたま藤原という看板を保っていますけれども、実際は現地人なわけ。都から下ってきた藤原魚名（うおな）の段階では完全に都人ですから、これがたったの4、5世代で現地を制圧してしまうわけ。秀郷は下野の一国を制圧してしまいますので、彼個人が強かったということもあるでしょうけれども、こうして3回、現地の世代と血統的に融合し、区別がつかないまでに混ざり合ってしまう、それが大事な戦略だったのだと思うわけ。

そう考えると、最初の武士は藤原利仁です。記録上、はっきり、この人は武士と認定して

いいだろうと言える最初の間は、利仁なのです。この利仁は、芥川龍之介（あくたがわりゅうのすけ）の『芋粥（いもがゆ）』で有名ですよ。元ネタは『今昔物語集（こんじゃくものがたりしゅう）』の話ですけれども。利仁が、ある五位の人から「芋粥を腹いっぱい食べたい」と言われたら、「分かった、食わせてやる」と言って、どこに連れていったかという、越前（えちぜん）に連れていきましたよね。芥川の小説でも思い出せると思うのですが、彼は都ではなく越前に連れていきました。なぜかという、彼は越前の人間だからですよ。お母さんが越前の人、秦豊国（はたのとよくに）という人の娘であり、自分の奥さんもまた越前の有力者。姓は不明ですが、有仁という人の婿になっています。彼は都でも活動するし、鎮守府将軍（ちんじゅふしょうぐん）として奥州でも活躍しますが、どうも彼の力の源は、越前という土着の間人と結び付いたことにあるらしい。現実に利仁の子孫である斎藤一族は、越前を中心とする北陸を本拠地として栄えますよね。その後、武蔵（むさし）とかに進出してくる連中もいますけれど、基本的には、この人の子孫は室町時代まで北陸で栄えます。そういうことを考えると、やはり現地人と婚姻関係を重ねて溶け込むということがどれほど大事かということが、この系図を見ると分かるわけです。

という感じで、この3種の氏族が融合した証拠が、それぞれ個別に、いろいろな史料に断片的に見えてきます。それぞれに弱みと強みがありますね。王臣子孫、強みとしては高貴な血統。血統がなぜ良いのかというと、中央との強いパイプです。つまり、藤原姓を名乗っていて、どこかで藤原氏に属していれば、摂関家とのパイプがどこかで形成されるわけです。ご存じの方もいらっしゃると思うのですが、平将門は、ある段階で一度、摂政（せつしょう）、藤原忠平（ただひら）に手紙を送っていますよね。自分の立場を正当化するために、摂政に、じかに手紙を送っています。このパイプですよ。摂政というのは天皇の代理人ですから、この摂政さえ説得できれば、反逆ではないと納得してもらえれば処罰は免れるわけです。この中央との強いパイプは結構大事でして、後に平維良（これよし）という人間が房総半島の辺りで暴れ回って、国衙（こくが）を焼き払うというような、とんでもないことをしています。彼と将門の違いは結局、何かというと、平維良はちゃんと道長（みちなが）とつながっていたのです。だから、道長が全部、都で握りつぶしてくれました。同じことをやった将門は、最後の最後で中央とのパイプを丁寧に扱わなかったのです。途中で切れちゃった摂政と最後までつながっていて、もし賄賂を送っていたら反逆に認定されなかった可能性が随分あります。それぐらい、中央とのパイプというものは強いわけです。

それから、良い官職を望めますよね。国司になって、そして、現地で収奪する正当な理由。もちろん、いろいろな敵がいるのですけれども、足場を手に入れることができます。私が大事だと思うのは、昔の社会というのは貴族制社会です。身分制というのは、身分が高いほど同じ罪に対して罰が軽いということです。今日でも「上級国民」という言葉があるし、例えば裏金問題もありましたよね。われわれが苦しい思いで税金を納めているのに、納めなかったらすごく国税当局から怒られるのに、どうして上のほうは「ごめんなさい」の一言で済むのか。でもこれは、権力の形として当たり前です。同じ罪を犯しても権力を持っている

ほうが処罰されない。これは社会の鉄則ですよ。古代は、それがルール化されていました。きちんとルール化されていて、どんな罪を犯しても、ほぼ実刑を受けません。偉い人が罪を犯すと、「さあ、どうやって彼を減刑しようか」という話になって、位を1個ずつ剥奪して、この罪と相殺。官職を剥奪して相殺。勲功があれば、それと相殺。それでも罪が残ったら、「あとは罰金をいくら払ってくれば、これであなたの罪は帳消し」という仕組みが律令制でできているので、身分が高いということは直接的な利益があります。

ただし、弱みがあって、先ほどから申し上げているように、物理的な軍事力を持っていないということ。それから、そもそも食えなくて関東に来たのですから、自力で食う経済力が足りないということ。これも当たり前ですが、都でずっと暮らしていたわけですから、地方でのパイプが足りない。地方で生きていくには、これだけでは生きていけないわけですね。こういう強みと弱みが王臣子孫にはあります。

一方、武人輩出氏族というのは、そこそこの血統はあります。坂上とか、多治比とか、文室というのはそんなに悪い血筋ではありませんが、大納言とか中納言(ちゅうなごん)とか、公卿(くぎょう)になれるような地位ではもうないですね。この血統だと中央で勝負できないのです。昔は藤原氏がそんなに多くなかったし、源氏も平氏もいなかったからよかったですけど、平安時代になって源氏や平氏が出現して、藤原氏がどんどん増えてくると、ポストの数は限りがあるので、割を食うのはこの人たちということになる。坂上田村麻呂たちの強みとしては武芸。1人のソルジャーとしての戦闘能力。それから、上に立つコマンダーとしての指揮する能力ですね。圧倒的な蓄積と能力があるというのが強みになりますが、しかし、いかんせん中央での扱いが低いわけです。

日本の古代とか中世は、そもそも現場を軽視するというか、実際に実技を扱う人間を軽く、というより見下す傾向があります。こまごまと実際の技術を現場で扱うというのは、下々の卑しい人間のすることであって、上にいる人間はそういうことをしてはいけないという価値観があります。ですから、戦争の現場にいるという、そのこと自体が身分の上昇を阻みます。中央での扱いは、とても低くなっていきますね。朝廷は働きに対して報いるところが少ない。先ほど申し上げたようなサラリーでは到底、彼らの働きに見合わないわけです。だから、経済力が足りない。さらに、地方でパイプが足りません。彼らは朝廷と密着して働いてきましたので、やはり地方社会で生きてくには足場が足りないということなのですね。

最後に、私が「卑姓地方豪族(ひせいちほうごうぞく)」と呼んでいるのですけれども、坂上とか、そういうのになかない、聞いたこともないような卑姓の人たちがいます。『新撰姓氏録(しんせんしょうじろく)』という古代日本の姓を集めた本を見ると、日本には実にさまざまな姓があったことがわかる。数百の姓があります。そのうちのほとんどは歴史学者でさえも聞いたことがないような姓ですけれども、そういった姓の人間が地方で百姓、あるいはちょっとうまくいくと郡司レベルで頑張っている生息しているわけですね。彼らは地方での蓄積、そして、それに伴う名望があるという強みがありますし、先ほどの京都のたとえで申し上げたように、その地方社会でずっと暮らしてきたわけですから、緊密なネットワー

クをつくっています。人や富を現地で最も直接的に動かせるのは、やっぱりこの人たちですね。徴税の現場にいる人たちですから、物流、人と富の流れを一番現場でつかんでいるはずの人は、この人たちということになります。この人たちが集めたものを、さらに王臣子孫が上のほうで搾取していく。搾取は何段階も踏んでいくので、実際にこの人たちが、まさに生産現場から第1次の搾取をする側でもあるし、その次にされる側でもあるということです。

ただ、弱みは、圧倒的に姓が尊くない。官職というのは、どうしても姓と関連があります。生まれがこの程度以上じゃないと、こういう地位には就けられない、という縛りがどうしても朝廷にはあるので、この人たちの血統だとあまりいい官職に就けない。それはつまり、生き残る可能性が減るということです。良い官職に就けば就くほど搾取できるチャンスが増えるわけです。地方で生きているものだから、中央へのパイプが欠如しています。姓が尊ければ、藤原つながりで地方の藤原氏が摂関家に対話することができても、この人たちが直接、摂政や関白と対話できる可能性はあまり高くはないですね。皆無ではなく、都に列参して、いろいろなことを訴えることはありますが、取り上げてもらえる可能性の問題ですよ。経済力が強いかというと、別に強くはありません。現地で民から徴税した分は直ちに、次の日には別の人間に搾取されるわけですから、そんなに経済力が強いわけでもない。領主階級ですから、時々、暇な人間がいて、馬に乗って弓を引いたりする人もいますが、しかし、しょせん、素人芸です。素人の集まりにすぎないわけです。烏合の衆です。軍事力、武芸となると、素人とプロでは話が違ってきます。時々、荒くれ者はいるのですが、決定的な軍事力を持ってないという弱点があります。

これらを全部、総合すると三者三様に強みと弱みがあるわけですが、ある段階で、誰が言いたかったのかは分からないのですが、「これらを全部足せばいいじゃない」ということが気付かれたわけですね。「みんなの強みを持ち寄って、みんなの弱みを消し合えばいいじゃない」と気付かれたわけです。その結果、藤原秀郷は現地人との婚姻を重ねて。秀郷の先祖が何世代もわたって現地人と婚姻する。あるいは、将門や平良兼の武士団の中に武人輩出氏族が収まるというのは、そうして融合した結果ですね。そうして、混ざれば、お互いに弱点を消し合える。混ざってみた結果、生まれて、融合して、相互補完して生まれてきたのが武士。当時の言葉で言う、兵（つわもの）なのだろうと、私は差し当たり結論しているわけです。

古代的な要素の創発の産物としての武士

ここに表れているのは全て、古代の要素なのですね。武士というのは全く新しい存在なのですが、それを形成した一つ一つの要素は、解剖していくと古代のパーツになります。何も新しいものはないではないかと思われるかもしれませんが、この三つのパーツをこのように組み合わせたことが、これまで一度もなかったわけですね。こういうように、こういう場所で、こう組み合わせると新しい強いものが生まれた。これでいけるのではないかと、というように試行錯誤していくというのが、初期の武士団の在り方なのかなと私は考えてい

ます。その意味で、武士とは融合の産物に他ならない。成立そのものが、融合なくして生まれれないと言ったらよいでしょうか。何かが生まれて、そこに後からいろいろなものがおまけとして合流したわけではないのですね。それぞれが欠かせない要素であり、この三つが合流して、初めて武士が生まれる。融合なくして武士はないと思うわけです。

従って、生まれ方がそうなので、武士は統合を志向すると私は考えています。「武士は、なぜ、領土を拡大していこうとするのか。なぜ、鎌倉幕府のような巨大な武士の組織ができるのか。なぜ、その後の武士は幕府という形で日本全国を支配しようとするのか。武士は、なぜ、自分の支配する対象をどんどん拡大するのか」という問いを立てた、ある歴史学者がいて。その人がどう答えたかは忘れてしまったのですが、これ、始まりの問題だろうと思うのですね。なぜかと言われると、始まりがそうだったからなのじゃないかなと思うのです。この初期の武士の在り方を見ていると、周りにあるものを全部、巻き込んでいきます。自分のために使えるものは全部、巻き込んで、自分の下僕にするなり、友達にするなりして、大きな台風の目として、いろんなものを巻き込んでいくなと思ったのです。

古代的な要素を新しく組み合わせていくわけですがけれども、もともとの要素、複数の要素を合わせて生まれた結果、元のどれも持ってなかった要素が生まれる。これを「創発（そうはつ）」というのです。私は、武士というのは古代的な要素同士の創発の産物と言っていいと思うのですね。足し算では捉えられないと思っているのです。単に、王臣子孫と武人輩出氏族と卑姓地方豪族を足しただけの強さだろうかというところではありません。「1+1+1」が、どう考えても「3」ではないのですね。中世という社会をつくり上げ、日本全体を席卷してしまう。武士が生まれて以降、朝廷が武士をコントロールできたことは、ほぼ一度もありません。武士が従順な限りにおいては朝廷の支配に服するのですがけれども、実力的にはコントロールできない。手が付けられません。

これほどの強さを持って、平清盛（きよもり）が後に登場してきて、あっという間に朝廷のトップに駆け上っていきます。彼の場合は、武士だというだけでは説明がつかない別の要素がありますけれども、その清盛を踏まえて、源頼朝という人が出てきて、気付いたら日本全国、武士によって統一されていて、日本全国、津々浦々に武士がいて、守護（しゅご）と地頭（じとう）がいて、彼らのための経費を、朝廷も含めて日本全国が負担しないといけなくなってくる。日本の治安は全て幕府が担うという、そういう仕組みが、あっという間にできてしまったのですね。どうも、急に駆け上って印象が強いのです。それは恐らく、次第に力を付けたという、教科書とかでありがちな説明ではどうにも納得できないですね。あれは生徒にこつこつ勉強させるために言っているのですかね。頑張ると次第に力を付けていってこうなるよ、という教育なのか分からないのですが、現実ってそうじゃないですよ。突然、飛躍が訪れます。武士は、そういうタイプの成長をしたと私は思っています。少しずつ力を付けて閾値（いきち）を越えたのではなくて、ある日、なにかの化学反応で、突然、勢いよく実力が上がってしまう。コイが滝を上っていくように突然、成長する。またしばらく停滞して、突然、成長するというのを武士の歴史は、室町まで繰り返していると思

うのです。

周りのものを全部、飲み込んでいきますので、私はブラックホールに似ているなど思っています。将門は、まさにそうですよね。関東地方の全てを飲み込みました。将門が全部を制圧してしまい、従って、関東ではそれまで群盗（ぐんとう）という治安問題があったのですけれども、その群盗問題が解決します。将門が全部飲み込んだからです。その将門を藤原秀郷が倒したことによって、朝廷が一応、関東地方を制圧したという形が完成します。関東地方は後に秀郷一族と平氏一族で取り合いになっていきますので、また戦の巷になるのですけれども。しかし、武士が覇権を握ったということは全く動かなくなります。武士以外の勢力が、少しでも関東地方で高い地位に就くなど、利権を握るということは観察できません。もしかしたらあったのかもしれないのですけれども、目立つ記録にはそういう形跡がありません。こうして、さまざまなものを飲み込んで武士団というものができていく。そういうお話がしたかったのです。

最近の本でも書いたと思うのですが、まず、武士というものができて、周りに武士団が形成されるわけではないということを申し上げたいのです。武士というのは、最初から武士団として成立します。さまざまなものを寄せ集めた一つの企業、あるいは集団として、全体でさまざまな分業をしながら一つに融合し、一つの目的に向かって集団で進んでいく。これが武士団です。最初から武士団として生まれ、そのトップを、たまたまわれわれは記録によく残る武士として認識している、というように考えています。将門が有名ですが、その下にたくさんいろいろな人がいます。われわれは藤原秀郷を一個人として認識しますが、秀郷の下には名前が残らなかったいろいろなスタッフがいたはずなのですね。秀郷のスタッフは本当に名前が残っていないので、秀郷だけがスーパーヒーローだのように思いがちですが、そうだったはずはなくて、あれは集団の力だったはずなのです。そういうようにして、さまざまなものを取り込んでいった。何でも周りにあるものを取り込んでいくのだったら、目の前に土地があれば欲しい、目の前に富があれば奪うというのが一つの行動原理であるならば、それをとことん突き詰めていくと日本全土に広がるということが説明はできますよね。

本当かどうか分からないのですが、私の友人でロシアの大好きな人がいて、彼が「あの人たちは変わっている」といいます。領土に対する拡張の意欲が半端じゃないと言うのですね。シベリアとか、持っていても仕方ない土地をロシア人って持ちたがるじゃないですか。シベリアって、人が住めない土地で、シベリア抑留などのように、人を流罪にするなど抑圧するためにありますよね。なぜ、あんな土地欲しがるとかと思うたら、ロシア人って、目の前に土地があったら欲しいのですって。なぜもへったくれもなく、そこに土地があるなら欲しい、それがロシア人の行動原理だということです。武士も、もしかしたらそうなのかもしれないと思う次第です。

武士登場の前段階としての群盗・俘囚問題

それで、もう一つ、先ほど申し上げた、武士の成立そのものとは直接関わるか微妙なのですが、「群盗」という問題にちょっと言及したく思います。なぜこんなことを言いたいかというと、地方社会のことをぜひ知っていただきたいからなのです。平安時代の地方社会が、いかに荒れていたかということをお伝えするのに、この群盗というキーワードをどうしてもお伝えしたいのです。細かいことは時間の都合もあるので、なかなか難しいのですけれども。

武士の登場の前段階として、889年の物部氏永（もののべのうじなが）の乱があります。将門が登場する直前です。910～30年代に将門が暴れますので、その前段階ですね。この物部氏永の乱は群盗の反乱でして、何が起こったのかというと、上野（こうずけ）、信濃（しなの）、甲斐（かい）、武蔵の4カ国が、少なくとも12年間にわたって群盗という強盗団、組織犯罪の集団に制圧されてしまって、無政府状態になるのです。この状態の直後に将門の乱というのが起こるのですけれども、この二つが無関係とは考えられないのです。将門は一つの武士の完成形なのですけれども、それが現れる直前に北関東、それから、ちょっと関東より西側になりますが、信濃と甲斐、あの辺りが無政府状態になっていたことは絶対に無関係ではないと思ったのです。この群盗問題が将門の乱とぶつかり合った結果、関東に一つの新しい秩序ができた。時系列的にはそう考えるしかないのです。群盗のことを考えなければ駄目だなと思ったのです。

群盗は日本中に現れるのですけれども、特に武蔵を中心として、関東地方にはとても多く現れました。群盗が現れる地域を見てみると、朝廷が置いた牧（まき）の分布と重なります。牧というのは、馬の生産・飼育・管理の施設で、朝廷が管理していました。馬は、もともと日本の在来の動物ではなくて、朝鮮半島経由で日本に入ってきた外来の生物です。単に生物として輸入したのではなくて、産業として輸入していますので、飼育の方法、それから、馬を操縦する方法、繁殖の方法、さまざまなテクノロジーと合わせて、パッケージとして大体5世紀ぐらいに日本に入ってきたと考えられます。朝鮮半島経由と考えると、ほとんど間違いないのではないかなと思うのですけれども、結論だけ申し上げますと、軍馬として入ってきます。つまり、軍用、兵器の一種として、軍需産業として入ってきます。馬をどれぐらい上手に扱えるか、コントロールできるかが戦の行く末を決定するのです。その馬を飼育する設備を牧というのです。国家で管理しています。その分布を見ると、一番多いのが信濃の16カ所。次に上野の9カ所。さらに武蔵・甲斐というふうに、日本全国の馬の生産地帯は、ほとんどが北関東の西側に位置しています。長野県、群馬県、埼玉県、東京都、山梨県。これは全部、地続きの一つの地域なのですけれども、そこで大多数の日本の馬を生産しています。

この4カ国が、物部氏永の乱で制圧された4カ国と完璧に一致するのです。つまり、物部氏永の乱というのは、牧の所在国を制圧しているということと表裏一体の関係にある。彼らは馬を自在に操って、神出鬼没。機動力というのが一番大事でして、突然、現れて富を奪って消えていく。これが群盗の強みなのです。1カ所にとどまっているのではなくて、どこからともなくやってきて、気付くと何百人、何千人といるのですよ。暴れるだけ暴れて、

現地の人が通報して、朝廷の警察がやってくる頃にはクモの子を散らすように、ぱあっと逃げるのですね。これがまとまってではなく、本当にばらばらに逃げるので、朝廷軍は追跡できないのです。そのようにして、どこからともなく集まり、暴れて、解散していくというやり方。どこに現れるのかが分かりません。陸では馬を持っています、海では船を持っていますので、本当に機動力が高いのですね。そういうような、馬をうまく犯罪に使う集団がいて、その人たちが牧を制圧すると、そのまま無政府状態の独立国になってしまう。それが将門の乱の直前の、物部氏永の乱の本質なのだなと思うのです。

2012年に放送された「平清盛」という大河ドラマに登場した、橋本さとしさんが演じた源為朝(ためとも)の写真を見たとき、私の持っている群盗のイメージとぴったりだったのですね。この柄の悪さ、この恐ろしさ。俳優の演技のうまさもあるのでしょうけど、何という柄の悪さ！これです。これが群盗のイメージにぴったり。ちなみに同じ「平清盛」に出てきた海賊もイメージどおりでした。海賊というのは、要するに海の群盗ですね。

この人たちがどのように日本社会を揺さぶっていったかという、798年、これが群盗が初めて記録に現れた年です。美濃(みの)、つまり、岐阜県近辺で群盗が百姓を襲撃した。これがなぜ大事かという、平安京ができたのは、「鳴くよ、ウグイス、平安京」と覚えておとり、794年です。たった4年前ですね。つまり、平安時代の開幕とともに群盗は日本に出現し、以後、全くコントロールできなくなります。日本で、その後、いろいろなことが起こります。嵯峨天皇の時期に当たる814年には、出雲(いずも)で俘囚(ふしゅう)が反乱を起こします。俘囚というのは、蝦夷の中で朝廷に帰服、屈服した者です。屈服すると生き残ることは許されるのですが、その代わり、根拠地から引き剥がされて、内地に強制移住させられます。いろいろな所に強制移住させられて。どうも危なそうなやつほど西のほうに送り込むという傾向があって、出雲に強制移住させられた連中もいるし、四国の伊予(いよ)などにも移されました。比較的、大丈夫だろうという連中は上総などに移住させますね。全くの見込み違いで、その後、上総というのは俘囚の反乱の火薬庫になるので、どうしようもなくなるのですけれども。そういう俘囚が日本全国にいます。

彼らはいろいろな理由で反乱を起こします。この人たちは戦わせると強いので勝てないわけですね。この俘囚が日本全国で暴れる。畿内諸国で群盗が放火、殺人を重ねるとか、だんだん包囲の輪が狭まってきていますよね。美濃から畿内諸国、そして、ついに840年、都で群盗が一斉蜂起することが起こります。まだ平安時代が始まって、たった50年です。あとはひたすら全国で、こういう事件のオンパレードですね。848年には上総で、丸子廻毛(わにこのつむじ)という俘囚が大反乱を起こします。そのうち、地方社会というのは国府・国司に対して反逆を犯すのが当たり前になってきます。857年になると、郡司と百姓が300人、結託して、対馬守(つしまのかみ)を射殺するというようなことが起こり始めます。861年には武蔵。これは「山々」と書いてあるので秩父を指すでしょうから、多分、埼玉県なのだと思いますが、「群盗が山々に充満」したりします。出雲で王臣子孫の浮浪人が反抗をするなど、「陵虐(りょうぎゃく)」つまり暴行・傷害の限りを尽くすようなことが865年に起こ

っています。

この年表で、いかに頻繁にあちこちで救いがたい事件が起こっていたかということ、ぜひ感じていただきたいのです。870年には上総（かずさ）で群盗化した俘囚の兵（つわもの）が破壊・略奪を行っています。ここで俘囚が群盗と結び付いたということがはっきり言えません。倭人だけでやっていた群盗に、当然ながら俘囚は結び付いて、手を結べるならお互い手を結びますので、こうして上総で暴れたり、あるいは下総（しもうさ）で俘囚が暴れたりですね。先ほど申し上げた元慶の乱が878年。883年には、また上総で俘囚30人が群盗化。

「国司軍1000人で勝てず」。たった30人の俘囚に対して、国司軍1000人が勝てません。これが俘囚の強さです。彼らの弓馬術は注目されます。俘囚は本当に弓馬術が上手で、何故上手なのか不思議なのですけれど、とにかく戦わせると強いですね。

さきほどから上総が3回くらい出てきましたね。下総も出てきます。この辺、群盗とか俘囚の反乱の一つのメッカと言える地域なのだと思うのです。後に、将門やその伯父、いともたちもみな、下総や常陸（ひたち）に本拠地をつくりますね。後に、その一派の子孫である平忠常、これは千葉氏の祖先になりますが、忠常が下総、上総、安房（あわ）辺りを中心に暴れ回りますよね。この武士の一番大規模な反乱が、なぜ房総半島を中心に起こるのかというのは大きな謎で、まだ解けていないと思うのですけれど、こういう歴史の下地が影響を与えていないとは考えられないのです。房総半島一帯というのは、国司が全く統治できない無政府地帯です。その状態は恐らく、後から入ってきた武士が自分の勢力を拡大する前の地ならしとして、何か意味を持っていたのだらうと思うのですよね。時代が経っていくと群盗が国司を射殺するとか、いろいろなことが起こります。この「射殺」という言葉が結構大事でして、必ず、この頃殺される国司は射殺されるのです。つまり、弓矢で殺されています。その辺りもまた武士の武器が弓矢であったということと、多分、どこかでつながっているのだらうなという気がします。あるいは逆かもしれないですね。国司を殺すような反乱は弓矢を扱える人じゃないと成し遂げられないのかもしれない。そういうように考えてもいいのかもしれない。

陽成（ようぜい）天皇という、暴力に明け暮れた天皇がいます。下が荒れただけではなく、上も荒れたのです。883年に内裏（だいり）で撲殺死体が発見されるのですけれど、よく調べてみたら、どうも陽成天皇が犯人らしいということが分かって、「これは隠滅しなければ」という大騒ぎになるのですね。この陽成天皇というのはいろいろなことをするのですが、あまりに素行が悪いので、当時の関白（かんぱく）、藤原基経（もとつね）から「天皇を辞めてください」という話になって、引きずり下ろされます。引きずり下ろされた後、随分、長生きするのですね。80歳ぐらいまで生きて、当時としては長命だと思います。

この人が、天皇を辞めさせられた恨みもあってか、すさまじい荒れ方をします。まず、自分の従者を武器で脅すとか、自分の部下の娘を武器で殴打して、縄で縛って水底に沈めるとか。また、狩りをするために誰かの家に行って、「ここを拠点にするから」と言って武力で占領したり、南の宇治のほうに行って、土地の境界を全部、破壊して、「ここは俺の狩り場

だ」と言ってみたりですね。身分の高い人の狩りというのは自分でやるのではなくて、勢子（せこ）を大量に動員して獲物を追い詰めていくというやり方ですから、マンパワーが必要ですね。そのマンパワー、勝手にそこら辺の百姓を動員して、言うこと聞かないと暴力を振るう。そういうことに明け暮れる。これが作り話じゃないのですよ。当時の宇多天皇の日記に書いてあるのです。宇多天皇は、「最近、陽成上皇には本当に困っている。最近ではこんなことして」と。そして最後に、ある人が宇多天皇に向かってこう言うのですよ。「天下の無法者は皆、陽成院の従者」と。これが作り話だったらいいのですけれど、残念ながら史実なのです。

こういう人間が上にいて、やっていることは群盗と同じです。つまり、上皇が群盗になってしまったのです。そんな国家で群盗の取り締まりできると思いますか？ 宇多天皇はこれを取り締まれない。先代の天皇だからです。天皇家が荒れると、天皇とか関白が遠慮してしまって取り締まらない。上がこんなことやっていいなら、下は上に倣いますよね。というわけで、「何だ、上皇があれをやっていいなら誰だってやっていいでしょう」とみんな勘違いをし、日本中がさらに荒れていきます。この暴力に明け暮れた陽成天皇のおかげで、日本の治安は一気に悪化したと考えてよいですね。

そんなことがあった結果、先ほど申し上げた甲斐・武蔵・上野・信濃、このちょうど一つの領域に群盗が大集結し、無政府状態になります。12年間、誰もこれを鎮圧することができないのです。手を出せる人間がいなかったのですね。何故だと思いますけれども、先ほど申し上げたように、全てが日本の名だたる牧の所在地であって、なるほど、牧を押さえるということと、現地を制圧する力を持つということはイコールなのだということがよく分かる。そういう地域なので、そうすると逆に、ここ（千葉市）がそれに漏れていることにお気付きいただきたいのですね。この房総、あるいは常陸も含めてもいいのですけれども、ちょうど将門が、あるいは将門の伯父たち、良兼や良将とか、平氏一族が暴れたのがちょうどこの辺で、実は重なっていないという問題があります。恐らく、甲斐・武蔵・上野・信濃は群盗かその残党が押さえていて、よそから、ぱっと入ってきても、そう簡単に手出しできない土地だったのでしょね。なので、将門たちは恐らく消去法でこの辺に増えていったのではないのかなと考えています。

そのことを傍証する情報がもう一つあります。藤原秀郷は下野を制圧したのですけれども、下野は物部氏永の乱で無政府になった地域と微妙に重なっていない。だから、どうも微妙にすみ分けているようなのですね。なぜ、将門の乱が房総地方で起こるのか、私はずっと難しい問題だと思っていましたけれども、なるほど、（房総地方から見て）武蔵より向こう側は手が出せなかったのだらうかと、最近は思っています。武蔵に手を出せないなら、相模もです。そんなわけで、この辺が群盗の地域、ここが秀郷の地域、この辺が平氏の地域というように、何となくお互い手出しできない地域をすみ分けていて、これを踏み破って、将門が統一に走りだすのが、また歴史の大きな転換だと思うのですね。

皆さまがたもご存じのとおり、将門はこの相模・武蔵・下野・上野を、全部含めて制圧し

てしまいます。確か、将門は甲斐と伊豆（いず）まで制圧したと思うので、つまり、群盗が制圧していた地域を、将門が圧倒的な武力で一気に自分のものにしてしまったわけです。その中に下野が入っていて、下野は秀郷のもので、当然、秀郷は黙っていないわけですよ。秀郷と将門とは当時、きれいにすみ分けていて、将門たちの初期の内紛に秀郷は全く関与してこないのです。そして、お互い縄張りを守っている分にはよかったですけど、将門の権力が下野を侵犯するに及んで、「うちの縄張りを侵されたら、それは話が違ふよ」ということになって、秀郷が敵対していく。いろいろ苦戦するのですが、最終的には秀郷が将門を倒してしまうということになります。

そうすると、将門の乱というものが何を意味するかというと、この群盗問題の一番手が付けられない状態、日本の群盗史上、一番ひどい状態、「これを誰がどうするの」という状態だったのですが、誰がどうしたか全く記録に書いてないのです。記録に出ないまま、気付いたらその問題は終わっているのです。なぜなのだろうと思うのですが、その直後に将門が関東を制圧したということを考えると、将門のおかげで、少なくともこの辺は全部、平らげられたのだらうなと考えざるを得ないですね。将門の父や伯父たちが出てきたときはまだ手出しができなくて、この辺にいたのですが、将門が強いので、群盗問題を解決することができました。その将門を秀郷が倒したことによって、坂東全域が、少なくとも群盗の巣窟ではなくなるという形で、新たな展開を迎えるということになるのです。そういう意味で、何となく全域で起こったことの全体像が見えたらいいなと、個人的には思っているわけです。

ちなみに、この群盗問題についてもうちちょっとだけお話しします。899年、足柄坂（あしがらざか）と碓氷坂（うすいざか）に関が設けられて、無政府地帯が遮断されます。足柄の関は有名ですね。東国と西国を分ける関。西から来た場合、最後の関所になります。箱根の辺りは伝統的に関所がありますよね。江戸時代になっても「入り鉄砲と出女」といわれるような関所がありますけれど、そもそも、なぜ足柄近辺に関所があるのかというのはなかなか、箱根を旅行しても説明されないと思うのです。その根本は物部氏永の乱のせいです。何のための関所かというと、「群盗には手が付けられないので、よし、ここにふたをしてしまおう」といって閉めたふたが足柄の関所。もう一つが、東山道側の碓氷峠の関所ということになります。「鎮圧はできないけど、頼むからここからこっちは来てくれるな」とふたをそこにして、しばらく様子を見守ろうという苦し紛れでできたのが、この二つの関所ということになります。

そうこうしているうちに、いろいろな国司がまた射殺されるなど、世の中はどんどん荒れていくのですが、こういう状況がある中で、私が武士第1号と考える藤原利仁が登場しますね。911年に上野介として、どうも群馬県の辺りで活躍したらしい。たった1年で上総介になっています。上野介・上総介というのはどちらも、二つの国は親王任国といって、守ではなく介がトップなので、上野のトップになった後、上総のトップになったわけですね。2年後に鎮守府（ちんじゅふ）将軍になっています。これほど交代が早いのは、当時のいろ

いろなパターンを見ると、今すぐやってほしい仕事があるから着任させて、仕事が終わったらすぐ離任させるパターンですね。離任させるのもなぜかという、次にやってほしい仕事があるから。大体、武力での鎮圧になるので、利仁がこの頃、上野と上総の平定をそれなりに成し遂げたのだらうと考えられます。

914年に、藤原利仁が鎮守府将軍になります。これまで怪しいといわれていたのですが、いろいろ考えて、私は確かなこととして認めていいたらうと思うのです。鎮守府将軍、つまり、陸奥を制圧する蝦夷との戦争の最前線の総責任者になるわけです。だから、彼はそういう実績が評価されて群盗鎮圧。この時期に関東地方にこういう人間が来る理由は、群盗鎮圧以外にあり得ないので、恐らく利仁が上野とか上総の群盗とか俘囚をどんどん制圧していったのだらう。それなりに戦果を上げたから、鎮守府将軍に起用されたのだと考えられます。この中に上総が入っていますよね。上総といえば俘囚の反乱の火薬庫で、誰も手が付けられなかったのですが、利仁が出てくると状況が変わったと見なさざるを得ないですね。その後、将門の一族が上総にも拠点を置き始めるということ考えると、どうも現地の地ならしの一部を利仁がやったのではないかなと私は考えています。

秀郷と将門

915年に上野介、上野のトップの藤原厚載（あつとし）という人が現地人に射殺されています。これが何を意味するかというと、当時は、弱い人間が国司になった瞬間、射殺されるということです。当時の国司は命懸けの仕事で、強い人間を坂東の国司にしないと現地の統率ができない。そのためにこういう、後にわれわれが武士と呼ぶ存在が認知され始めて起用されていった。「武士でなくても何とかなるだらう」と思ったら、そうではないのですね。利仁が離れた瞬間、次の着任した人間が射殺されていますから、やっぱり強くないと駄目なのだということが、この頃から認識され始めます。翌年、916年、下野の国司が藤原秀郷たちについて朝廷に報告します。罪人18人の流刑に失敗した。「彼らは流刑の判決を受けたのだけれど、全く刑に服そうとしないので、何とかしてください」と朝廷に泣きついたわけです。これによって、916年段階で秀郷が下野を実効支配していたということがはっきり言えます。国司が手を出せない勢力。そして、何より重要なのは、秀郷が史料に名前を現したとき、彼はヒーローとしてではなく、犯罪者として姿を現したということが大事ですよ。つまり、彼もしょせん、群盗の同類だということです。

929年、またしても下野の国司が藤原秀郷の濫行鎮圧に失敗。この間、13年ぐらいたっていますけれども、13年を経て、なお、下野の国司は秀郷を取り押さえることができません。「どうしたらいいですか」と朝廷に泣きつきます。朝廷もどうしようもないのですけれども、これによって、この時期も秀郷一派が下野を制圧していたということが分かるわけですね。将門がおじの平良兼と対立して、最初の合戦をするのが931年。つまり、たった2年後です。将門の乱が始まる2年前までに、秀郷は犯罪者、つまり、群盗として下野を制圧することに成功しています。その直前に利仁が上総とか上野で頑張って、群盗、俘囚対策を頑張る。

そういうことがモザイク模様を成すようにこの頃起こっていて、これをきちんと時系列的に押さえて、地図と対照すると、この時期に房総を含む関東地方で起こっていた武士の最初の興り、その流れがもう少し詳しく見えてくるのではないのかなと思っています。

この房総半島、千葉は広くて、しかも私の地元ではないものですから、なかなかぴんと来ないのですが、県立中央博物館に先ほど行ってきて、房総半島の地形などをいろいろ見て、千葉に来るたびに思うのは、相模（さがみ）と地形が違うということですね。房総半島の地形は本当に特殊なのだな、とつくづく思っています。この土地の形から、彼らがこういう歴史を歩むのは必然性があるのだろうけれども、やっぱり机の上で地図を見ているだけでは分からないなと思います。千葉は広いので、なかなか自分の足で全部、歩くことは難しいのですけれども、いろいろな必然性が見えてくるなと思います。その辺り、まだこれからの課題になっていますけれど、将門の乱と忠常の乱がこの場所で起こったということには強い必然性があると、どうしても思います。どこでもよかったわけではないと思うのです。相模だったらあの反乱は起こらなかったでしょう。こうして承平天慶の乱が起こっていくわけですが、もうここから先はそんなに詳しく申し上げることもないと思うのです。

利仁は、体制に対しては従順でしたね。彼は体制に反逆した記録がありません。それに対して藤原秀郷は反逆者だった記録しかないのですけれども、将門が強過ぎて朝廷が手を焼いた結果、彼に白羽の矢が立つわけです。将門を倒せる人間が誰もいない。平貞盛（さだもり）という将門の同族がいますけれど、彼も全然、手が出せなくて、父は殺されているのですけれど、それでも「彼と対立したくない、できれば仲直りしたい」と言って逃げ回っているわけです。誰にもどうしようもなかったのだけれど、朝廷が諦めて、「誰でもいいから将門の首を取ったやつにはご褒美をあげるよ。前歴は問わない、前科は問わない」という。「それなら」ということで秀郷が立ち上がるわけですね。犯罪を積み重ねてきた犯罪者の代表格みたいな秀郷も、将門さえ倒せば、これまでの犯罪者としての前歴を全部、消してもらえるところか、ご褒美ももらえるというので、急きょ立ち上がり、しかも、将門が秀郷の庭、テリトリーである下野に侵略してきますから、どうしようと思っていたところ、大手を振って戦争をして良いということが分かったので立ち上がり、結果として倒してしまいました。そうして、関東地方は前科 100 犯ぐらいの犯罪者によって平定されました、ということになります。ただ、結果オーライなので、「関東地方に平和をもたらしてくれたのでヒーローだということにしましょう」ということでヒーローになり、国司の地位とか、いくつか田をもらって、めでたしめでたしとなりました。

将門は滅んだものの、他の平氏一族は滅んでいませんので、平氏一族と秀郷一族の間で争い、ここに源氏も介入してきます。これで武蔵・下野・上野辺りを中心として、いろいろな取り合いが起こって、地方社会で争いをするという段階があり、次にそこから脱して行って、「そうだ、実力でけんかしてもいいんだけど、都で謀略を使って相手を失脚させればいいのではないか」ということに気付く人が出ます。それが源氏の源満仲でして、秀郷一族は戦うとめっぽう強いのですけれども、どうも政治に弱かったのですね。都での政治に負けてしまう

ということなので、後に安和の変という事件が起こって、左大臣（さだいじん）の源高明（たかあきら）が失脚させられてしまうのですけれど、その煽りで秀郷一派が全部失脚して、都で出世できる芽を摘まれてしまいます。それでくじけてしまったあたりに、秀郷一族の弱さがあるなという気がしますね。

源氏の急成長

源氏はやっぱり強いですよ。都に居場所がなくなって、どれほど犯罪者のレッテルを貼られても、懲りずに地方で勢力盛り返しますからね。源義朝（よしとも）は関東地方を實力で制圧して、相馬御厨（そうまのみくりや）という千葉県にある伊勢神宮領を制圧。それを制圧した後、恐らく東京湾を渡って、神奈川県にある大庭御厨（おおばのみくりや）を制圧しますね。1140年代だったと思うのですけれども。全く不法な活動です。何の合法性もありません。同じ頃、為朝という弟は九州の大宰府（だざいふ）を襲撃して、九州を完全に非合法に制圧してしまいますね。朝廷がどれほど文句を言っても源氏はめげずに、犯罪者としての道を突き進んでいきます。それでも最後に何とかなると思っているのですね。秀郷一族はなぜかこれでめげて、活動が低調になってしまいます。なぜなのかは説明がつかいませんが、結局、史上最強の武士だったはずの秀郷は、息子の世代にそれを受け継ぐことができなくて、源氏の下風に立つことになります。

忠常の乱でも、誰にもどうにもできなかった忠常の反乱が、源頼信（よりのぶ）が介入した瞬間、解決するわけですよ。なぜなのかは分かりません。ただ、満仲・頼信という2世代で、源氏がとてつもない強さを身に付けて、先行していた平氏とか秀郷流藤原氏が全く太刀打ちできない力を身に付けてしまいます。頼信は忠常と戦ったら、直ちに彼を屈服させましたし、2度目の反乱では頼信が出馬すると言った瞬間、忠常は降参しています。すさまじい制圧力と言ったらいいのでしょうか、支配力があります。忠常と対立していた他の平氏がいますけれども、その連中、平維幹（これもと）という常陸の平氏も、すさまじい力を持っているものの、頼信には簡単に屈服しますね。平氏が100年ぐらいかけて東関東で築き上げてきた勢力を、後からやってきた頼信が、あっという間にかっさらっていきます。これを足場として、前九年合戦（ぜんくねんかっせん）を戦い、それを足場として後三年合戦（ごさんねんかっせん）を戦うという感じで、坂東のほぼ全域の武士が源氏の下に組織されてしまいます。前九年合戦の段階で頼信の息子、頼義（よりよし）が参戦した段階で、既に坂東全域の武士が彼の「門客（もんかく）」、つまり彼の部下になった。彼の部下でない武士はいなくなっていた、という状況が大体11世紀の半ばまでに完成しています。

これほどまでのことがなぜできたのかは、実は謎として残っていて、ここが最後の謎ですね。源氏の急成長。まさに源氏の成長は、じりじり、ちょっとずつではない。突然、一気に成長するのですね。何故なのかは分かりません。その謎は誰か解いてくれないかなと思うのですけれども、どうしてもこの時代、史料に制約があるものですから、分かることと分からないことがあるなという感じがしています。

おわりに

こういう感じで、武士の成立にはさまざまな疑問が残っておりますし、私自身が主張していることも仮説にすぎないので、あくまでも参考までにお聞きいただけたらと思うのですが、自分のやった仕事に唯一、価値があるとすれば、他の研究者が仮説を出すことさえ諦めてしまった問題に、取りあえず私は諦めないで仮説を提出してみた、という点があります。私の仮説は、いずれ克服されていくのでしょうかけれども、でも、仮説がないことには克服の仕様もありません。その意味で、どうせ学問は全部、捨て石として、後から来る人に克服されていきますが、せめて一歩、前進できたかなというようには思っているわけです。

これはあくまでも一つ、私のアイデアであって、史実かどうかは定かではありませんが、現状、こういう説明の仕方もありではないかと思っておりますし、ここに来てお話ししてみますと、やっぱり房総地方というのは地理的に武士の成立を促す必然性があるのだな、だからもう少し、この土地の形そのものを細かく分析してみたいなと思うのです。それは今後の課題なのですが、今日こういう機会をいただいたことで、そうした課題があって、有意義な課題があるのだなと自覚できたことは、私にとっても大変収穫だと思って感謝申し上げる次第です。大体、これでお時間になりましたので、私からのお話はおしまいとさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

司会 それでは、以上で桃崎先生の講演を終了させていただきます。先生、ありがとうございました。では、ただ今から10分ほどの休憩とさせていただきます。その後、会場からいただいた先生へのご質問にご回答いただきますので、先生へのご質問のある方は、あまり時間がございませんが、質問用紙のほうにご記入いただきまして、受付のほうにお渡しいただければと思います。

司会 それでは、再開のお時間となりましたので再開いたします。会場の皆さまからいただきました、ご質問のほうを桃崎先生に回答していただきたいと思っております。時間が限られておりますので、全てご紹介できるか分かりませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

桃崎 質疑の時間、短くなってしまいましたが、いただいた質問ペーパー、ありがとうございます。時間の都合があるので、即答できるものは即答させていただきます。「最初の武士は誰と思われますか」。藤原利仁で間違いないと思います。それから、「武士が王臣子孫、武

人輩出氏族、卑姓地方豪族の融合したものの根拠となった史実、史料を教えてください」。同時に、「律令制以前の古い武人輩出氏族が登場する史料を教えてください」ということですけども、その辺りの史料は著書の『武士の起源を解きあかす』に全部載っていて、私が気付いたものは一つ残らず載っております。律令制以前の古い武人輩出氏族については『日本書紀 (にほんしょき)』と『古事記 (こじき)』をご覧ください。まずはそちらで押さえることができます。

それから、「武士が自ら武士と認識、自己規定、自称したのはいつ頃からでしょうか」。少なくとも『将門記』、つまり、将門の乱の段階で、将門の伯父たちが「兵の道」という言葉を使っています。武士というのは、ちょっと後の時代の言葉ですが、兵と同じと考えて良いと私は思っています。つわものの道 (生き方)、つまり生き方・死に方やさまざまな倫理を含めたもので、「俺たちはつわものなのだから、こうすべきだ」という物言いが将門の1世代前にはもう生まれています。それより前にさかのぼることが私にはできないのですが、遅くともその頃、10世紀の始まったぐらいにはあったと言っているのではないのでしょうかと思います。

それから、「前九年の役で謀反人として斬首された藤原経清 (つねきよ) の息子、清衡 (きよひら) は、なぜ陸奥守 (むつのかみ) になれたのでしょうか」というご質問なのですが、陸奥守にはなっておりません。なったのは清衡の孫の秀衡 (ひでひら) が初めてですね。基本的に清衡は自分のことを「東夷の遠曾 (とういのおんしゅう)」、俘囚の元締めであると中尊寺 (ちゅうそんじ) の供養願文 (くようがんもん) で言っています。俘囚というのは本当に難しい集団で、倭人、アイヌ人の混成集団なのですね。さらに言うと、俘囚・蝦夷であった安倍氏 (あべし) が、前九年合戦でつらくなって奥のほうに逃げていったら、言葉の通じない怖いやつらがいたので戻ってきた、という話が『今昔物語集』に載っています。アイヌ語は理解できたと思われる安倍氏が、言葉が通じないと言っているのだから、多分、オホーツク人だと思うのですけれど、北のほうにいろいろな民族がいたようなのですね。そういうのが全部、混ざって蝦夷となっています。

この連中を国司の地位に就けることを、基本的に律令国家、朝廷はしないですね。あくまでも奥州というのは朝廷から国司を派遣して、首根っこを押さえて支配する地域、搾取するための地域です。とにかく黄金と馬が取れますからね。日本で最も品質の良い馬は奥州産ですし、唯一の産金国が陸奥 (むつ) ですので、そこからいろいろなものを取るためには中央とのパイプが必要。現地人に陸奥守をやらせては絶対に駄目ですね。というよりも、現地人はそもそも国司に採用しないというのが、日本と中国の根本的な官僚制です。絶対に諸国のトップには採用しません。それなのに、なぜ秀衡が陸奥守になったかということ、源平合戦で不利になった平家が、自分の味方にするために強引に任命しただけです。現地人を国司にしたのは平家政権の平宗盛 (むねもり) が無理やりやっただけじゃないのでしょうか。もちろん秀衡は全く動かなくて意味がなかったのですけれども、そういう特殊事例とお考えください。

それから、「弓馬について、幼少から弓馬術を習うとき、馬術と弓術、どちらを先に習うのでしょうか」という質問。どっちだろうとさっき考えたのですが、馬術でしょうねと思います。なぜならば、私自身、中学から弓術、弓道をやっていたので思うのですけれど、弓術って体がある程度、完成しないとできないですね。弓の大きさに子ども用というものは存在しなくて、中学1年生の体格でぎりぎり弓を引くことができます。日本の弓は長弓、長い弓でして、2メートル20センチくらいあるのですね。時代によって違いますけれども。これが面白いところで、ちょうど今、授業でも言っているのですけれど、騎馬民族って普通、短弓を使うのですよ。モンゴル人でもパルティア人でも。ところが、日本は長弓を使うのですね。しかも、日本って農耕民族だったはずですよ。弥生人の子孫ですから。弥生人って稲作するから弥生人なのですよ。

その子孫の日本人が、なぜ騎馬戦術に優れているのかというのは本当に不思議な問題ですが、やっぱり騎馬民族じゃないなと思わせるのは短弓を使わないからです。あの長弓、小学生の身長では扱うことができません。大きく引き絞らないといけないので、大人に近い体格、恐らく身長が140センチくらいはないと扱えないのではないのかなと思うのです。それに対して、馬というのはそうではないですよ。馬と弓と共に生きている民族といたら、まだモンゴル人が一部、そういうことをやっているらしいですが、恐らく馬と共に生きる人たちは、生まれると同時に馬と接しているのではないのでしょうか。これは体格の問題と関係なくできますので。私が今、机上の空論で考えた限りでは馬術が先であろうと結論します。弓は、子どもは扱えないと思います。

次にいきます。武士の祖が源平の家ばかりとなって、秀郷流などの藤原氏が残らなかった原因について、私は『平安王朝と源平武士』で、安和の変（あんなのへん）等の中央の政争に敗れたためと書いているわけです。それについてですけれども、「従者とか郎党（ろうとう）として下に立つ地方の武士たちが誰を主君として選ぶのか」というときに、単純に血統の問題ではないのか」というご質問をいただいています。「藤原氏より皇族出身の源平のほうが格上だった、このことが直接、大きな求心力をもたらした、そういう可能性は考えられないだろうか」というご質問をいただいています。これは今、結論を出せないのですが、一理あると思います。ただ、今は裏付けが取れないのですよね。秀郷一族は本当に活動が低調で、忠常の乱に対して一切、動いた形跡がないのです。ひとごとだと決め込んでいるのか分からないのですが、ただ、地理的な問題はあるなと思っています。利仁流は北陸から出てこないのですね。北陸か都にしかいない。北陸に閉じこもっていると、坂東で起こっている戦乱にアクセスすることができない。したければできますが、アクセスする理由がないのですね。

将門の乱に、そもそも利仁流は関与していない。忠常の乱、前九年合戦、後三年合戦とさまざまな戦争に、北陸にいた利仁流は地理的に離れていたので関わらなかった。問題は秀郷流ですよ。武蔵・上野・下野・信濃あたりに秀郷流はたくさんいて、後にそこから小山（おやま）とか、結城（ゆうき）とか、下河辺（しもこうべ）とか、有名な武士団が出ます。さらに、藤原姓の足利氏もいますよね、源氏の足利に駆逐されてしまいますけれども。そうい

う連中が源平合戦の直前までに大いに育っていた。小山などは巨大な武士団ですね。なぜ、あれほどの力を持ちながら上に立たなかったのかは、実はまだ私、答えを持っていません。今後の課題とさせていただきます。

あと2つですね。「関東以外の四国、九州地方の武士団の形勢はどのような状況でしょうか」。よく分からないのですが、きょう、詳しく触れなかった純友（すみとも）の乱、あれが海賊の乱の一つです。要するに、海賊というのは群盗で、起こることは関東と西国であまり変わらないと思います。九州は詳しく押さえることはできませんが、12世紀の半ばまでに恐らく坂東と同じことが起こっていたと思われま。薩摩平氏（さつまへいし）とか、有名な源平がいて、九州を押さえていて、そこに為朝が入って行って、さらに全体を制圧する。恐らくほとんど九州は変わらないだろうと思います。もちろん大宰府という、関東にはない特殊な求心点があるので、同じことが起こったとは言えませんが、大筋、変わらないのではないかと考えています。

畿内とか四国でどうなったかは定かではありませんが、四国では伊予で河野（こうの）という武士団が後に成長していきます。これは越智（おち）という古代氏族なので、恐らく海賊という活動、自分自身が海賊になるか、制圧するか、ひと皮むけば同じなのですけれども、恐らくそのあたりを足掛かりにして成長します。その後、平家の正盛（まさもり）と忠盛（ただもり）が海賊討伐を何度もやって、瀬戸内海を制圧していきます。これで武士団の編成ができたと思われるので、恐らくそちらはそちらで、少しだけ坂東より遅れて武士団が形成されたのではないのかなと考えられます。源平合戦の段階では、武士団の成熟度合いが明らかに西国側で遅れていて、特に山陰・山陽・四国はそうですね。選挙の泡沫候補のような小さい武士たちがたくさんいて、大きな武士団が育たないのです。恐らく成立段階の違いと思われま。もちろん、東国と西国の違いもあります。

最後に、「神奈川と千葉の地形の違いは何か」。これはなかなか難しいのですが。房総半島を見ていて思うのは、太平洋側と東京湾側の分断ですね。真ん中の山岳地帯があまりに険しいなと思っています。こういう山岳地帯がど真ん中にどんとある状況は、相模では確認できないですね。相模では西のほうの丹沢・大山のほうに行かないと山岳地帯がないので、広い平地の有無というのが少し違うのではないのかなと思います。もちろん、房総半島にも広い平地はあると思うのですけれども。あと、海に挟まれているか否か、大きな内海を持っているか否かなどがあると思いますし、海流の流れなども多分、影響があると思うのです。かつては、海は壁ではなくて道ですから。そう考えると、その辺りを考慮しないといけないのではないのかなと考えつつ、これは私の大事な課題だなと思ったので、今後、真面目に研究して、答えが出たら発表したいと思います。それでご勘弁をいただけますでしょうか。ということで、すみません、時間が過ぎてしまいました。これでご質問、お答えしたことになりま。すでしょうか。

司会 以上で質疑のほうを終了させていただきます。桃崎先生の御講演も、こちらで終了となります。桃崎先生、ありがとうございました。

(了)